

2016 年度

北海道の労働と福祉を考える会



総会資料

目次

1. はじめに 2 (山内太郎)
2. 活動概要 (横) 4 (山内太郎)
3. 人数調査 7 (関本幸一)
4. 聞き取り調査 8 (山内太郎)
5. 炊き出し 10 (越橋宣之)
6. 同伴・フォローアップ 12 (加藤智彦)
7. 夜回り 14 (関本幸一)
8. 学習会 15 (山内太郎・他)
9. 労福会がお世話になった方々 26 (山内太郎)
10. 会計報告 27 (波田地利子)
11. 2016 年度役員・会員名簿 29 (波田地利子)
12. 審議事項 30 (山内太郎)
13. 私とろうふく会 33 (各位)

1. はじめに（2016年度を振り返って）

2016年度は事務局長が不在のままスタートした。労福会の慢性的で危機的な人手不足は設立当初からのことでもあったし、過去にも事務局長不在で年度がスタートするということはあった。ただこれまでは、見るに見かねた人や押し付けられた人たち（歴代の事務局長）が登場してくれて、何とか首の皮一枚で一年一年を乗り切っていた。ところが今回は事務局長不在のまま年度が終わろうとしている。さすがにこれは初めての事態だ。規約によれば「会員の欠乏」によって労福会は解散するらしい（四条の二）。労福会もとうとうおしまいかと、そう思えたりもするのだが、こうして総会の報告書がつけられたということは、なかなかどうしてそうはならなかったわけである。結局なんだかんだと“持ってしまった”この一年間を簡単に振り返ってみたい。

年度当初、代表が事務局長を代行するという、よく考えると訳の分からないことが決まり、活動が始まった。この代行は、意志薄弱で自己主張が苦手であり、これといったこだわりもなかったのも、とりあえず前年度の総会で決まった活動方針を踏襲するしかなかった。そこで述べられていたことは活動内容の根本的な見直しであり、その具体的な策としての学習会の定例化であった。

労福会では過去にも学習会の定例化を試みているが、どれもうまくいっていなかった。あらかじめ文献を読んでくことやレジュメを作成することなど学習会は準備がタイヘンだからだ。長続きしないだろうから、というよりあまりタイヘンな思いをしたくないという理由で個別支援の活動報告書を基にした事例検討と札幌市内の生活困窮者支援団体の見学会を中心に据えて学習会を企画した（すでにある資料を使うことや、どこかへ見に行くだけなら、さほどタイヘンでもないだろうとの思惑があった）。それに、どこか遠い世界のような難しい文章を読むのはタイヘンだが、自分が直接かかわった人や支援につなげた団体のことになるとグッと身近で具体的な話になる。ということで最初は見学会と事例検討会を交互に行っていたが、そのうち事例検討を通して民生委員とのかかわりが課題として挙げられたので、北星大学の「社会問題と福祉を考える会（社福会）」というサークルと合同で民生委員制度に関する勉強会を行った。また、全国の生活困窮者支援団体間で「ホームレスの自立の支援に関する特別措置法」の延長を求める署名の呼びかけがあったので、そもそもなぜ延長が必要なのかを議論したり、個別支援活動で扱う事例の中で臨時福祉給付金の申請手続きが必要となったので、制度の概要を調べたりすることも学習会でされるようになった。今年度は厚生労働省のホームレス実態調査（聞き取り調査）が行われたので、調査経験を踏まえた振り返りの学習会を行ったりもした。つまり場当たりのだったり必要に迫られたりして学習会のテーマが決められていたのだが、今考えるとそれが良かったのかもしれない。毎回の学習会にはそれなりの人数が参加し、結果的にこれが2016年度の労福会の活動を特徴づけることになった。

また、2016年度は毎年行っている人数調査だけでなく、先述した聞き取り調査に加えて、ホームレス状態にあった人たちがどのような子ども時代を過ごしてきたかを聞き取る「子ども時代調査」もおこなった。こうした調査活動が複数回行われたことも今年度の特徴だろう。子ども時代調査の結果の整理や分析はまだできていないが、当事者の話を腰を落ち着けてじっくりと聞く機

会は意外とない。調査自体が我々にとって学びとなったし、来年度には取りまとめの作業に取り組みたいところである。

労福会独自で行う炊き出しを6月と11月の2回実施したが、特に11月の炊き出しは握り寿司を提供するという（おそらく）全国的にも例のない試みであった。食中毒などのリスクを考えればまず行わない企画であるが、それよりも新しいことに取り組んでみることに、参加した人たちの笑顔を引き出すことを選んだ（もちろん消毒方法等最低限のリスク回避と想定される批判に耐え得る理論武装を準備しつつ）。寿司を握る練習と称して寿司ネタを買ってきて、夜回りが終わった後にみんなで寿司パーティみたいなことを企画もした。考えてみれば今年度の労福会はここ数年で一番自由でのびのびと活動をしていたのかもしれない。

ただし、今ある状況は、昨年度までの事務局が苦勞して整備した労福会の様々な“決まりごと”の上に成り立っていることをここでは指摘しておきたい。過去の総会資料を見れば、ここ数年の事務局（特に事務局長・事務局次長）が地味で骨の折れる作業をコツコツと積み上げてきてくれた。今年度はその果実が実った年だったのではないか。皮肉なことにその年に事務局長が不在となってしまったわけだが、結局労福会はなんだかんだと“持ってしまった”わけで、それは先輩たちが「基礎体力」をつけてきてくれたからだと思う。足腰が鍛えられているとフットワークは自然と良くなる。自由でのびのびと活動するにもそれなりの基礎体力が必要だ。もちろん解散も危ぶまれる労福会の活動に興味を抱き、主体的にかかわろうとしていた現メンバーに恵まれたというのも大きい。幸い来年度は事務局が発足しそうなので、労福会は首の皮一枚でまた生き永らえた。本当に運のいい団体である。

ところで2016年度は、長年路上生活をしてきたホームレスのおじさんたちの多くが脱路上をしていった年でもあったと思う。それは年齢を重ねるうちに体調が悪くなって路上生活が続けられなくなったという「消極的な脱路上」が多かったかもしれないが、いくら声をかけても拒んできた脱路上を、ある出来事がきっかけで拍子抜けするくらいあっさり果してしまう場面には、支援とは何か、人間とは何かと考えないではいられないことであった。ただ、いずれにしても言えることは、彼らに対して粘り強く継続して関わり続けることの大切さを実感した年でもあったということだ。10年、15年路上生活をしているおじさんたちを待ち続けたからこそ、「その時」に遭遇する。これもこれまでかかわってきた労福会のメンバーが積み上げてきた果実の一つだろう。来年度も収穫があることを願うと同時に、来年度に何を残せたのか、この報告書を読んであらためて考えてみたいと思う。

2. 活動概要

	運営会議の議題及び企Ⓜの内容	夜回り人数		
		全体	札幌	大通り Ⓜ小路
3月	5日	21	7	5
	12日	21	7	5
	19日	21	8	6
	26日			
<p>総会に向けて／個別支援活動報告 総会に向けて 2015年度定例総会</p>				
4月	2日	25	9	5
	9日	20	9	5
	16日	23	11	4
	23日			
	30日	26	10	6
<p>今年度の役員について 今年度の役員について（新事務局長がⓂまるまでの措置と会計係） 臨時福祉給付金について 2016年度の運営方針と年間計Ⓜについて／個別支援活動報告 会議なし（エルプラ休館のため）</p>				
5月	7日	31	11	10
	14日	29	11	6
	21日	22	6	16
	28日			
<p>炊き出しの来場者に質問する。 学習会（札幌の野宿者支援のⓂ況） 炊き出しについて 会議なし（山内不在のため） 6月18日の「炊出し相談会」について／第2土曜日の学習会について／個別支援活動報告／夜回りの人員の確保について／Ⓜ活保護Ⓜ請書について</p>				
6月	4日	23	10	13
	11日	29	10	5
	18日			
	25日	0		
<p>会議なし（山内不在のため） 学習会（JOIN 朝回り参加／れおん・みんなの広場見学） 炊き出しについて 炊き出し 炊き出し企Ⓜの振り返り／学習会企Ⓜの検討／子ども時代調査について</p>				

7月	2日	7月の学習会について	25	9	6	10
	9日	学習会（ベトサダ・あじーる見学／事例検討会）	27	10	6	11
	16日	見学会と事例検討会の総括／子ども時代調査について／会費の納入〆況／その他（北星大実習〆、パン取りについて）	26	8	9	9
	23日	子ども時代調査について／星園プラザの入居者会議について／司法書士会と共催の炊き出し相談会の日程／会費納入〆況	27	10	17	
	30日	会議なし（山内不在のため）	22	8	6	8
8月	6日	子ども時代調査について	27	10	7	10
	13日		26	9	8	9
	20日	子ども時代調査について／個別支援活動報告				
	27日	子ども時代調査について／個別支援活動報告	23	8	7	8
9月	3日	会議なし（山内不在のため）				
	9日（金）	学習会（Tさん事例検討）				
	10日	会議なし（山内不在のため）	28	9	9	10
	17日	厚労省調査（ホームレスの実態に関する全国調査）／子ども時代の思い出に関する調査について／10月22日炊き出しについて／反貧困ネット全国集会の参加について／個別支援活動報告	24	10	6	8
	24日	10月22日の炊き出しについて／厚労省調査（実態調査）に実施について／11月の炊き出しについて／子ども時代調査について／9月学習会の振り返りと今後の予定について				
10月	1日		28	10	9	9
	8日	会議なし（山内不在のため）	23	12	11	
	14日（金）	学習会（民〆委員について）				
	15日	会議なし（エルプラ体館のため）	31	12	7	12
	22日	炊き出し・聞き取り調査				
11月	29日	10月22日炊き出しの反省／厚労省実態調査の後始末（反省会的な）／11月の炊き出しの日程と内容について／子ども時代調査について／11月の夜回りパン取りスケジュール調整／1支援活動報告	29	6	10	13
	5日		26	9	10	7
	12日	11月26日炊き出しに向けて／11月学習会について／会員の募集について／子ども時代の調査について／12月の夜回りパン取りについて／その他（年末の予定について）	26	9	5	12

19日	学習会（聞き取り調査の振り返り）	32	7	13
26日	11月26日炊き出しに向けて 炊き出し			
3日	人数調査の日程／臨時福祉給付金について／12月の勉強会について／その他（12月23日（金）に運営会議）	22	9	7
10日	人数調査について／臨時福祉給付金について／個別支援活動報告（爪切り購入が予定／その他（12月26日に夜回り実施）	33	10	11
17日	臨時福祉給付金の申請状況報告／12月23日（金）学習会の内容について確認／12月26日（月）臨時夜回りについて	24	8	7
23日（金）	学習会（臨時福祉給付金／ホームレス自立支援法について） 個別支援活動報告／26日の臨時夜回りについて／ホームレス自立支援法の延長を戸める署名について／1月22日人数調査について	不明		
31日	臨時夜回り 会議・夜回りなし			
7日	人数調査の実施について	17	4	7
14日	人数調査の戸況確認／2月の炊き出しについて／総会について／支援活動報告	24	8	7
21日	人数調査の最終調整	25	6	11
22日（日）	人数調査			
28日	人数調査の振り返り／支援活動報告／2月4日炊き出しについて			
4日	炊き出し			
11日	炊き出しの振り返り／2月の学習会について／総会について／来年度の活動の見通しについて／支援活動報告／反貧困ネット北海道の上映会スタッフ募集	26	11	9
18日	総会の日程調整について／総会資料の作成について／支援活動報告／学習会について	21	9	6
25日	学習会（希望寮見学会）について／2016年度会計の戸況について／総会の議題について来年度の役員体制について／星園プラザの利戸について／その他（総会資料作成の確認）			

※第1, 2, 3, 5土曜日は夜回り実施（19：00～21：00）

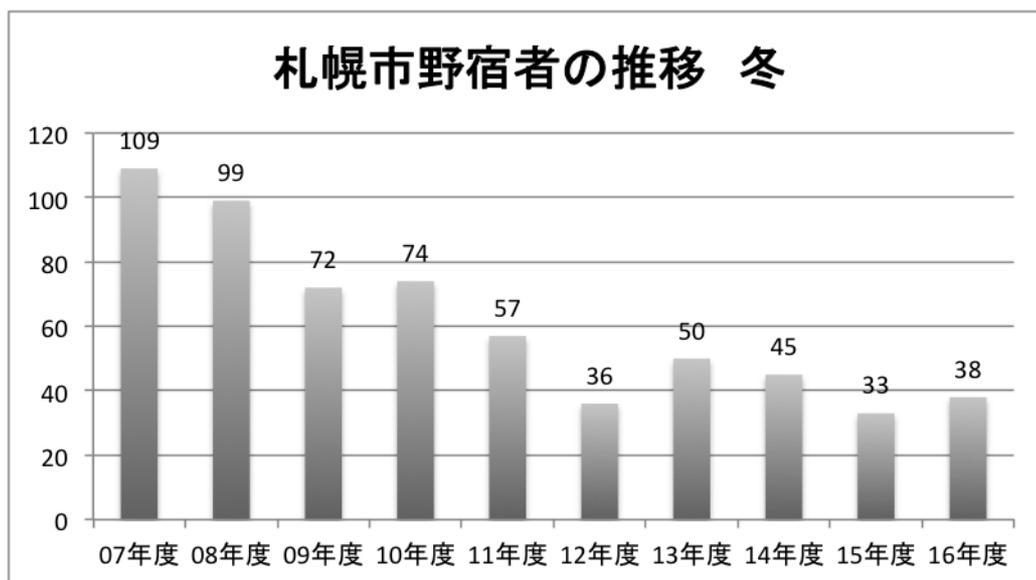
※個別支援活動は随時実施

3. 人数調査

今年度の人数調査は、冬の調査のみで1月22日（日）に行われました。調査内容につきましては、前年度と同様に行い、大きな変更点はありませんが、追加した点としては、野宿者が起居しそうな場所を予め説明し、周辺を重点的に探してもらったことです。今回、重点的に探してもらった場所は、地下に続く階段等の日常死角になっている場所やフードコートのある屋内型飲食施設、コンビニエンスストア等です。

今年度の調査に参加していただいた人数は35名でした。

昨年度の調査では野宿者は過去最低の人数になりましたが、今年度は5名増加しました。過去10年の人数変動は以下のグラフのようになります。全体としては減少傾向にあるものの、野宿者は常に起居しているという現状がわかります。



調査結果の詳しいことについて説明します。今回の調査では、昨年度と比較して札幌駅バスターミナルの野宿者数が減少し、狸小路・すすきの付近の野宿者数が増加しています。その他の場所では昨年度と比較して大きな変化はありませんでしたが、橋の下にも2名の野宿者を確認しています。札幌駅バスターミナルの野宿者数が減少した要因の一つは、野宿者の就寝中を狙ったイタズラ行為によるものと考えられます。イタズラ行為とは、中国系の4人程度のグループが就寝中の野宿者に雪玉や近くにあるコーンを投げつけていたというものです。このように現在の札幌駅バスターミナルは治安が悪いということで、すすきの付近に移動してきているのではないかと考えられます。今後もこのようなイタズラが続くのであれば、何らかの対策が必要だと思います。

寒空の元で夜を過ごす野宿者数は、この10年間で3分の1程度まで減少しましたが、零下の北海道であるにもかかわらず、毎日外で夜を明かしている野宿者の生活状況は変わりません。多くの支援や協力を得ていても野宿を続ける人達、物ばかりではない心と心の対話が必要なのではないのか……。私達はどのように向かい合っていくことが必要なのか考えなくてはいけないので

はと思います。

調査実施の反省点としては以下のようになりました。

- ・札幌市郊外を回るためのタクシーの到着時刻を早めに設定すべきだった。
- ・寒かったため調査員にカイロを配布すべきだった。
- ・昨年度の情報を事前に提供すべきだった。
- ・回った場所を地図上に明記してもらうべきだった。
- ・Facebook を利用して募集を行う場合、事前に Facebook での参加表明と合わせて労福会にメールを送ってもらうよう徹底した方がよかった。
- ・元ホームレスの方にお話しいただこうと思ったが、話をしていただける人を見つけられなかった。

<総会での議論> 調査終了直後の労福会関係者による人数公表は徹底して差し控えるべきである。

4. 聞き取り調査

(1) ホームレスの実態に関する全国調査（生活実態調査）

労福会では今年度二つの聞き取り調査を行いました。一つは厚生労働省が4～5年に1度実施している「ホームレスの実態に関する全国調査（生活実態調査）」を札幌市から委託を受けて行ったものです。これまでは1月に実施されていましたが、どういうわけか今回は10月実施ということでした。もしかしたらこの調査の根拠法であるホームレス自立支援法が来年度で終了予定であることが影響しているのかもしれませんが、いずれにせよ、札幌市の担当者も当惑したような感じで、調査の実施にあたっては結構無茶なスケジュールを提示されました（あまり詳しく書けないのですが10日間程度で、調査員の確保と調査手順の確認、10名の調査対象者の確保を前提に依頼、実施、調査票の提出とともに完了報告をせよという内容）。それで我々としては10月に行った炊き出しの日に合わせて、そこに参加した人にその場で依頼をして承諾が得られればそのまま調査を実施するという方法を取りました。その結果、9名の方が協力してくれました。さらにチカホ空間などで2名の方から聞き取り調査を行って、無事「ノルマ」の達成となりました。

行政からの委託調査のため、集計した調査結果について現段階では報告することはできないのですが、調査対象者の年齢層だけここに載せておくと、40代1名、50代5名、60代4名、80代1名でした。学習会の報告ページ（23ページ）に調査結果に対する所感や分析めいたことが書いてありますので参照してください。その際に調査票の質問項目番号が挿入されていますが、調査票は厚生労働省のHPに掲載されます。下記のURLは前回調査（2012年1月）の調査票ですがほとんど内容は変わっていません。2017年3月13日現在で今回調査の調査票はアップロードされておきませんので、参考までにここに載せておきます。

(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002rdwu-att/2r9852000002rlez.pdf>)。

(2) 子ども時代調査

上記の調査は、国が行なったホームレス者対象の公式な調査ということで、国の政策にも一定の影響を及ぼすものですが、調査項目が「仕事」と「住まい」に注目しすぎているという批判がホームレス支援業界では聞かれておりました。その批判は我々労福会としてもうなずけるものです。なぜ仕事を失ったのか、どうして住まいを失ったのかという問いはホームレス状態に陥る直接的な理由を明らかにするものかもしれませんが。しかし労福会の活動を通して我々が明らかにしなければならぬと感じたのは、仕事や住まいの問題以前に、その人が抱えている「生きにくさ」のようなものは何なのかということでした。もちろんどのようにしたら彼らの「生きにくさ」を明らかにできるのかは今のところ分かりません。ただ、今回はそういった問題意識を念頭に置いて、本人がどのような環境でこれまで過ごしてきたのか、どんな人と関係を結んできた・こなかったのかを知ることが大きなカギを握っているのではないかと考え、特に子ども時代をどのように過ごしてきたかを中心に聞き取る調査を企画しました。「子どもの貧困」という言葉がクローズアップされる状況にあって、ホームレス状態になってしまった方の子ども時代を明らかにすることは、「子どもの貧困」の延長にホームレス問題があるという問題提起ができるのではないかとという目論見もありました。

調査の企画自体は夏から練ってきたのですが、なかなか調査票の内容がまとまらず、結局調査そのものは年末の実施となりました。調査対象者はホームレス状態の方だけでなく、生活困窮者支援団体のシェルター利用者で過去に野宿経験のある方も範囲に含めました。その結果20代2名、40代1名、50代2名、60代4名、不明（教えてくれなかった）1名の合計10名の方に協力をしていただきました。現時点ではまだ分析まで手を付けられていないのですが（聞き取った内容のテープ起こしまでは終了しました）、聞き取った内容を概観したところ、ほとんどの人が子ども時代の過ごし方として極端な貧困状態にあったわけではないようです。子どもの貧困の延長にあるホームレス問題という構図は、そう分かりやすくは見えませんでした。とはいえ、もう少し注意深く分析をしていくと何か大きな発見があるかもしれません。来年度はこの調査結果を分析していくことが必要であると考えます。

最後に、今回の調査は質問に対して回答を選択肢から選択してもらうというアンケート形式の聞き取りではなく、いわゆるオープンクエスチョン（調査対象者に自由に語ってもらう）による半構造化面接調査でした。調査員となった労福会のメンバーも調査に慣れているわけではないので苦労が多かったように思います。調査終了後の反省点として挙げられたレポートを転記しておきます。

反省・改善点

- ・ 調査票にはテーマに収まりきれないことを書く欄が各セクションにあってもいいのかもしれない。あるいは調査票の最後に、補足分の章を用意しておくのでも深みがあります（調査員にとって）ように感じる。調査票としては所感を乗せられないと思うので、別立てで所感を書いてもらうのも良いかもしれない。
- ・ 人にもよるのかもしれないが、特に〇〇さんとしては今現在に至るまでの話をしたがった。幼少期の経験が青年期のどこにつながるのかを確認する形で、第4セクションにて大雑把に青年期のことについても聞いてみるというのかもしれない。

- ・ 調査員への最初の研修の段階で、各年頃での話の流れをうまく説明できると間違いなくよい。まずは、「周りの環境～出来事～思い出～トラウマ～大切な人～全体を見渡しての感じ方」というような話のせせらぎがあると、会話も途切れなくていいし、話す側もスムーズに（小山田と加藤は「話かもどっちゃうんですけど」を十数回つかった）話してくれるであろう。

テープレコーダーで録音するのは一長一短だと思った。後で聞きなおすことができ便利なのは確かだが、録音していると思うと、油断してきちんとメモを取らなかつたりすることがある。少なくとも私はそうだった。きちんとメモを取って相手の話の全体像を把握しておかないと、録音された音声を聞いて埋めるべき「穴」がそもそもどこにあるのか分からなかつたりするので、そういう意味では必ずしも録音したほうが良いとは限らないかもしれない。けっきょく心構えの問題になってしまうのだが、調査者は、「この人のこの話を聞くのは、後にも先にもこの一回だけ（テープレコーダーに頼らない）」というつもりで臨んだほうが良いと思う。

<総会での議論>・調査結果の共有→来年度の勉強会の議題。

- ・ 今後は青年期以降の話を書くと言ったところへつなげる。
- ・ 生活実態調査、子供時代調査共に調査員は20名程確保することができた。

5. 炊き出し

当会では、今年度、司法書士会との共催で法律相談会（2回）を兼ねた、炊き出し相談会を行っています。

来場者に単に暖かい場所や食事を提供するだけでなく、スタッフと信頼関係を築き、自立への可能性を探る手伝いをするを目的として行われています。

今年度行われた4回の炊き出しの概要は、表のとおりです。

回	日付	内容	会場	来場者	特記事項
1	6月18日	食事(いなり寿司、肉野菜スープ)・生活物資の提供、散髪、法律相談	中央区民センター	50人	労福会で調理・司法書士会数人との協力で実施
2	10月22日	食事(カレー)・生活物資の提供、衣料配布、散髪、法律相談、法律クイズ	中央区民センター	47人	司法書士会と共催 相談員12名 法律相談1件
3	11月26日	食事(寿司[卵焼き、カツオ、マグロ、イナダ、いなり、かつぱ巻き、納豆巻き]、あら汁)、衣料配布、映画上映	中央区民センター	45人	労福会で調理・実施
4	2月4日	食事(弁当)・生活物資の提供、衣料配布、散髪、法律相談、法律クイズ	札幌市民ホール	44人	司法書士会と共催 相談員15名 法律相談0件
					合計
					196人

1. 各回開催概要

第1回 6月18日(土)

中央区民センターで開催。司法書士会から数人のメンバーが協力してくださり、相談会が実施されました。食事は前年度もお願いしていた居酒屋「なみすけ」の店主の厨房をお借りし、労福会

でいなりずしと肉野菜スープを調理しました。

第2回 10月22日(土)

中央区民センターで開催。司法書士会との共催でカレーライスの提供、法律相談、法律クイズ、散髪、衣料配布を行いました。また、炊き出し中に炊き出しに参加して頂いた方の中で回答希望者に厚生労働省による「ホームレスの実態に関する全国調査(生活実態調査)を並行して実施しました。

第3回 11月26日(土)

中央区民センターで開催。全国でおそらく初めてとなる、寿司を握ってその場で提供しました。メニューはカツオ、マグロ、イナダ、いなり寿司、かっぱ巻き、納豆巻きの6種類、計8貫、そのほかにも居酒屋「なみすけ」で調理して頂いた「あら汁」を提供しました。

寿司を握るのは全く素人の労福会メンバーが行うことになりましたが、事前になみすけの店主の方から教わったり、独自で練習会を開いたりしました。結果は何度もお代わりに来る方もいて大好評でした。

その他に衣料配布も実施しました。また、映画上映会も開きましたが、寿司の影響からか観ていた方がわずかでした。これからは空いた時間に何を実施するべきか、映画上映ならば何を題材にすべきか検討課題になると思われます。

今回寿司は来場者の声から好評でしたが来場者数がほぼ他の炊き出しと横ばいであったのは、事前に寿司を提供すると告知をしていなかったことが一因とみられます。

第4回 2月4日(土)

札幌市民ホール(ワクワクホリデーホール)で開催。司法書士会との共催で弁当の提供、法律相談、法律クイズを行いました。実施して問題点として挙げたのが衣料配布と散髪が重なってしまった時の対処法です。散髪と衣料配布希望者には事前に整理券を配っています。しかし、散髪の番になって別室に呼ばれて髪を切ってもらっている途中で衣料配布の順番が回ってきたケースがみられました。これでは散髪を受ける人、受けない人の衣料配布の公平性が維持できないため、今後別の形で抽選を行うなど散髪と衣料配布を希望する方が不利益を被らない方法の検討が必要です。

炊き出しにおける課題。

前々年度の2014年度は3回炊き出しを開催し、来場者数は計112人でした。平均来場者数はおよそ37人でした。

前年度の2015年度は4回炊き出しを開催し、来場者数は計172人でした。平均来場者数は43人でした。

今年度の2016年度は4回炊き出しを開催し、来場者数の計196人でした。平均来場者数は49人でした。

炊き出しの来場者は年々増加傾向にあることが伺えますが、札幌市から委託を受けて毎年行っている路上生活者の概数調査から札幌の路上生活者は年々減少傾向にあることがわかっています。この増加は労福会で把握しているも、それまで炊き出しに来ていなかった路上生活者が参加するようになったからか、労福会で接点がなかったものの炊き出しに参加している人が増加したのか、



生活保護を受けている方の来場者が増えたのか現時点では不明ですが、こういった方が炊き出しに来られているのか、来場者数増加の背景には何があるのか今後の課題としたいです。

また、みなずき会で毎週水曜日と金曜日に行われている炊き出しにつきましては、みなずき会の諸事情により金曜日の炊き出しが中止されることになりました。この影響は必至で次年度の労福会での炊き出しの重要性は必然的に高まると考えられます。より一層充実した炊き出しの実施が求められています。

<総会での議論>・夜回りでのみなずき会中止についてアンケート調査の必要がある（後述）。

6. 同伴・フォローアップ 加藤

(1) 2016年度の生活保護同伴および相談支援活動の状況

生活保護同伴支援活動（2016年3月～2017年2月現在）

	本人の状況と年齢	野宿歴	日時	同伴／支援のきっかけ	申請（相談結果）	同伴者
A	居宅（65男）	—	8/24	前日の相談活動	申請に至らず	山内・小山田・加藤・西山

生活保護同伴以外の相談支援活動

	本人の状況と年齢	野宿歴	日時	同伴／支援のきっかけ	相談・支援の内容	同伴者
C	路上（44男）	3か月	5/1	夜回り	生活歴の聞き取り	楠
			5/2		病院同伴	楠・須田・加藤・西山
A	居宅（65男）	—	8/23	本人からの電話	部屋探しと生活保護申請について相談	山内・小山田・加藤・西山
D	居宅（37女）	—	8/28	本人からの電話	区役所職員への対応および民生委員との関係について相談	楠・酒井
E	路上（男）	不明	12/12	夜回り	臨時福祉給付金の申請に同伴	加藤・越橋
F	路上（男）	不明				
G	路上（61男）	16年	1/27	夜回り	同上	加藤

16年度は1名の生活保護同伴を行った。また、生活保護同伴以外にも、6名の相談に応じた。合

わせて7名の方に対応したことになる。同伴ないし支援のきっかけを見ると、夜回りをきっかけにしたケースと本人から会員個人に直接連絡が行ったケースとがほぼ半分ずつとなっている。いずれの場合でも相談内容を会員間で共有し、個人に負担が集中しないよう注意する必要があるだろう。以下、支援報告書の内容等をもとに、個別の事例について記述する。

① Aさんの事例

労福会の携帯に電話があり、生活保護や部屋探しについて相談したいとのことだったので、会って話を聞くことになった。相談内容は以下の通り。同棲中の元ホームレスの女性と不仲になり、彼女が部屋を出て行ってしまった。現在は同棲当時と同じところに一人で住んでいるが、部屋の契約は彼女の名義なので、いずれ出ていかなくてはならない。そのため、目下部屋探し中である。手元不如意であるので生活保護を申請したいが、一人で行くのは極まりが悪い。できたら同伴してほしい。

この相談を受けて翌日生活保護の申請に同伴した。ただし手持ちのお金がいくらあり、申請が通るかは不透明ということでこの日の申請は見送った。

相談の場でAさんは、元同棲相手の女性との関係を修復したいとも語っていた。このような場合に労福会がどの程度介入すべきであるかは難しい問題である。ひとまず今回は、労福会の側から二人の関係修復に働きかけることはしなかった。

② Dさんの事例

Dさんから楠さんに連絡があり、会って話を聞くことになった。Dさんは2013年（平成25年）に労福会が生活保護の申請に同伴している。相談内容は以下の通り。

先日白石区役所に赴いた際、職員の対応が原因でパニックを起こしてしまった。結局タクシーで病院に生き鎮静剤を打ってもらったが、損害を請求することはできるだろうか。また、2013年の生保申請時にDさんを労福会につないだ民生委員が、Dさんに交際や身体的な関係を強要していた。どうすればよいか。

上記の相談に対し以下のような回答と対応を行った。パニックによる損害の請求については、医師の診断書がないと難しい。民生委員については、本人が担当のCWに相談してみるとのことだったので、無理はしないように伝えた。

③ Gさんの事例

政府が配る平成28年度臨時福祉給付金（総額18000円）について、12月から夜回りにて周知し、必要があれば労福会が申請に同伴する旨を伝えていた。Gさんは申請を希望したが、住民票が札幌市になかったため、区役所に複数回同伴し、まずは札幌市に住民票を作成した。その後、市の給付金担当課に同伴し、給付金を受け取ることができた。

この支援の過程で、Gさんの住民票を労福会の事務所に置くことになった。住民票取得後に、この措置が妥当であったかが会の内部で話し合われた。結果、今回の措置はあくまで例外的なものであり、今後同様の事例があった場合には、原則として労福会の住所を貸さないことが確認された。

(2) フォローアップ活動（2月末日現在）

今年度のフォローアップの回数は、提出された報告書によれば8回を数える。ただしこれ以外にも会員が個人的に当事者を訪問したケースも多く、実際のフォローアップ回数は報告された回数の倍以上になるものと思われる。また訪問者（対応者）について見ると、フォローアップ活動が特定のスタッフに集中する傾向がある。これは前年度からの傾向が継続したものと見ることができる。

		年齢・性別	月日	活動の主な内容	場所	訪問者(対応者)
H	新規	55 男	3/6	入院時対応	病院	井上
			3/10			
			3/18			
			4/3			
			4/9			
			4/16			
I	継続	49 女	3/7	CW との面談に同席	区役所	山内・上田
J	継続	75 男	3/18	安否確認	本人宅	井上

今年度の反省は、記録が十分に残っていないことである。会員間の情報共有を進め、何かトラブルが発生した際に会として迅速に対応することができるよう、毎回の支援活動で記録をのこす必要があるだろう。次年度以降の課題としたい。

加藤智彦

<総会での議論>・メールでの報告があるとやはり良い。

- ・申請、病院、フォローアップ&その他（＝「上田書式」）の書式が欲しい。
- ・人ごとの記録表をつける（復活）ようにできたらよいのかもしれない。
- ・個人情報には配慮した上で記録表を自由に閲覧したい。

7. 夜回り 関本

今年度の夜回りは、毎週土曜日（第4土曜日を除く）19時にエルプラザ2階に集合し、2時間程度をかけ、札幌駅、大通り周辺、狸小路周辺の3コースで行いました。昨年度に引き続き夜回り表を利用し、情報の集積・共有化を図り取り組んできました。

配布物について

今年度は配布をカップ麺からパンに変更しました。その理由は、札幌市福祉生活支援センターのフードバンクより無償でパンを提供していただけるようになったためです。フードバンクにつ

いては、「関係団体」で説明がありますので、ご参照ください。

当事者の皆さんからは、「パンよりもカップ麺やおにぎりが欲しい。」「冬にはカイロが何枚か欲しい。」という意見も出されたため、今後、パンを配布するのか、あるいは別のものを配布するのか検討する必要があるとともに、配布物資の詳細についても状況を見ながら再考が必要です。

日付	札幌駅	大通り周辺	狸小路周辺	合計
2016年4月	9.5	5	8.8	23.3
5月	9.4	6.8	9.4	25.6
6月	10.5	5.9	10.8	27.2
7月	8.8	6.8	10.3	25.9
8月	9.2	6.9	9.3	25.4
9月	9	7.5	8.8	25.3
10月	10	7.8	9.5	27.3
11月	10	7.7	10.4	28.1
12月	9.5	7.8	7.5	24.8
2017年1月	6.9	8.1	7.9	22.9
2月	9	6	8.5	23.5

今年度は、生活保護を受け、路上生活から脱路上をした方、忽然と姿を消してしまい行方のわからない方がいました。夜回りで出会う路上生活者は、昨年度よりも減ったように感じています。しかし、路上に固定化してしまった人達は変わらずに路上での生活を続けるという、ホームレスの固定化の方向に向かっている状況が見受けられます。このような人達に対してどのように関わり、対処していくのが良いのかという明確な方向性をつかむことはできていません。

(人数は平均値)

- <総会での議論>
- ・みなずき会のたきだし減少に伴う健康悪化の状態を調査する必要がある。
 - ・労福会の炊き出しを増やすか、渡す食料を増やすのかの議論を急ぐべき。
 - ・カイロや下着等の寄付を積極的に募ってはどうか？
 - ・夜回りの過去の記録を把握したい。コピー用紙がいいのかノートに戻すのか。

8. 学習会

2016年6月11日□学習会□山内

朝回りとれおん見学

札幌市ではジョインという生活困窮者支援団体が朝回りを行っています。労福会は夜回りは行

っていますが、朝回りは行っていないため、どんな感じで行われているのかを見学しました。朝6時にチカホ空間の北側入り口に集合し、朝回りは始まりました。夜回りでは見かけない、比較的若い方も多くいらっしゃり、夜とはまた違った雰囲気であることが分かりました。ただ、眠っている人が多くてあまり会話をすることはできないようです。チカホ空間を大通公園まで南下した後、二手に分かれ、札幌駅やポールタウン、オーロラタウンなどの地下街を中心にかなり広範囲を回っておりました。労福会の夜回りに比べて歩く範囲が広く、およそ3時間歩きっぱなしでした。労福の夜回りも3時間ほどですが、座って会話をする時間もあるので歩く距離はだいぶ違うように感じました。

夜回りの後には手稲区にあるれおんの見学に行きました。施設の機能や実際の部屋なども見せてもらいました。障害を持っている若い人が多いという印象で、かなり時間をかけた丁寧な支援をされているようでした。

見学はお昼前に終わったのですが、朝回りから施設見学で体はかなり疲れしました。この日は夕方から会議と夜回りがあるといううんざりするようなスケジュールになってしまったので、今後学習会として朝回りと施設見学を組み合わせ土曜日に実施するのはやめた方が良いと思いました。

2016年6月11日の学習会(みんなの広場見学)□加藤

6月11日の朝回り後、山中さんの案内で「みんなの広場」を見学した。最初に北22条の本部を見学し、そのあとで実際に入居者が住んでいるアパートの一室を見せてもらった。

アパートの部屋では、入居者であるTさんのお話を伺った。Tさんは山下清を思わせる風貌の男性で、道内各地を転々としたあと「みんなの広場」にたどり着いたとのことだった。Tさんには軽度の知的障害もあるらしく、その支援には「これでおしまい」という明確なゴールが見出しがたい。この点で、「みんなの広場」は、ホームレス支援を行う労福会と本質的な部分で問題を共有していると感じた。

2016年7月9日□事例検討会□小山田

経緯：事例検討会によってこれまで対応者だけで負担していた個別の問題を共有すること必要があるとの判断から行うことにした。加えて個人情報というナイーブな問題からブラックボックスになりがちな実際の事例や、良いモデルケースまでを可能な限り共に考えることは重要な学習になるとの観点から、当事者の匿名性を担保しつつ非会員も参加させた。なお、配布資料は全て回収し、シュレーダーにて廃棄した。

・Mさん

今まで数年前に脱路上したMさんのケースを参考に、一つのモデルケースとしての支援を考えた。Mさんの場合には人柄もよく品行方正な雰囲気もあったため、たまたま空きが出た施設の管理人になった。路上生活者の脱路上というとすぐに「土木工事」「パソコン事務」などの労働を念頭に考えられがちであるが様々なモデルの検討について検証した。

ことに、Mさんのように収入は高くないが、住み込みで働けたり、極端に人に制約されない労働という

のが鍵なのではないかとそれぞれの参加者で意見をだしあった。一方でやはり、社会情勢の元で実際に運用される労働体系の難しさにまで話題は及んだ。

・ Tさん

生活保護をうけている Tさんより「自分名義ではあるが受け取っていない保険金の収入があるとケースワーカーに疑われている、助けてほしい」との相談で会に連絡が来た。実際に会員が面会したところ、本人は肝心なところをはぐらかしたり、「自分の保険金を受け取った元彼の名前は覚えていない」といった要領のえないことを話していたため、ケースワーカーもそれを疑っているようだった。そういった不正受給に該当してしまいかねない一連の流れのため、ケースワーカーは Tさんへきつくあたり、ケースワーカーと Tさんの関係は壊滅的であった。Tさんに端を発する問題があることは認めつつ、まるで自供を迫る警察のような態度のケースワーカーの対応の問題点について議論し、労福会としてどのようなサポートができるのかを検討した。主に次のようなものが上がった。

・ 実際と一緒に銀行に確認に行く約束をしたもののドタキャンをする Tさんは明らかに怪しいので本人が誠意を見せない限り、味方はするべきではないという意見。

・ まずは Tさんとケースワーカーの関係改善を優先し、ケースワーカーへの説得と、Tさん自身にかかる疑いを検証するべきという意見。

・ 我々以外に Tさんの味方などいないのだから、そして別にそれで幾ばかりの被害がでるわけではないのだから、徹底的に Tさんの味方をしてはどうかという意見。

そういった議論の末に、「もし仮に Tさんが嘘をついてまで生活保護を受けることに固執しているのだとして、そのように良識的でない人の社会とのつながり方を考えるべきではないか。」といったメタ的な話へと進展した。しかしまさしく、この問題は生活保護受給者が実際に抱える“不適応”とみなされる性質の本質のように思われた。日本中で生活保護がバッシングされる背景には、こうした「自立した社会人」「ルールを守れる社会人」という基準との乖離があるように思う。「ずるいやつら」、「不正なやつら」、「社会のクズ」という言葉であしらわれて、そしてそこで途切れてしまう不器用な人間達と社会との接点について、非常に考えさせられるばかりであった。

2016年7月9日 ベトサダ・AsyI□見学会□+□事例検討会□関本・小山田

<参加者> ろうふく会員5名 北海学園大学生4名 非会員2名

<次第>

14:00 集合 最寄駅集合

A 班 Asy; (集合場所: 北34条駅)

B 班ベトサダ (集合場所: 北18条駅)

14:15 各施設見学

16:00 報告会&同伴報告検討会 (場所: エルプラザ 2階 ミーティングルーム)

18:00 時 終了予定

<見学会>

A 班/ Asyl (文責：関本)

今回の施設見学では、Asyl の施設内の見学、Asyl の概要説明、過去の利用者の方の話をさせていただきました。

施設内の見学では、共同スペースのみの見学となりました。Asyl で管理している部屋が埋まっていたため、実際に当事者の方が使用している部屋は見学することができませんでした。共同スペースはきれいに片付いていました。

Asyl の概要については、施設管理人の波田地さんから説明がありました。Asyl の概要は次のようになります。

- ・対象者は女性のみで、女性に特化したシェルター
- ・滞在期限は3ヶ月以内
- ・アパート型の住居で、定員は6名
- ・利用者の方の年齢はさまざま

滞在期間の3ヶ月間で就労に結びつけることは難しく、多くの利用者の方が生活保護受給などに移るようです。部屋を移動する際には、当事者の望む条件と確保できる部屋の条件の差を調整するのが難しいなど多くの障害があります。業務としては、施設の管理運営以外にも、シェルターを出た後の元利用者のサポートをすることも多いようです。

過去にシェルターを利用していた方の話の内容は、自分がシェルターに入るまでの経緯、ホームレスの人が自分の現状をどのように思っているのか、というようなものでした。どのようにして生活困窮者になってしまうのかの1つの具体例として、考えることがたくさんありました。長い時間をかけて、元生活困窮者の方から話を聞く機会は滅多にないため、参加者は全員真剣な様子で話を聞いていました。

労福会で活動していると、比較的若い女性の生活困窮者について話を聞くことはほとんどありません。その中で、今回の施設見学は、普段関わることの少なかった世界の断片について知る機会を与えてくれました。今まであまり考えていませんでしたが、労福会の活動で見えない貧困は、自分の周囲にたくさん存在しているようです。認識していないだけで視界に入っている貧困がたくさんあるようです。通勤・通学で通る街や用事で通り過ぎる街並みの中に生活困窮者は確かに存在しているのです。今回のように関係団体の施設見学をすることで、労福会として認識できる問題が増え、活動を支える会員や参加者の刺激になるように思います。

B 班/ ベトサダ (文責：小山田)

学生数名で「自立支援事業所ベトサダ」に着くと、さっそく施設長の山崎さんに居宅の案内をしていただいた。玄関横から奥に入り、生活部屋の中を見る頃には参加した学生は皆、真剣な顔になっていた。最初に大学生を驚かせたのは、入居者一人ずつに与えられた布団一枚分のスペースと防火対策のために新調したというカーテンだった。4人が“寝る”には十分と思えた9畳が、4人で“住む”には狭いのだという感覚を皆が感じていた。そして先刻たたまれたばかりの布団と、その横に置かれた青年誌(『モーニング』と『マガジン』)がとてもリアルだった。(そのリアルさはテレビが写す悲愴感や困窮感や逼迫感ではなく、自分の足がすくむような生きることの臨場感だった。)

部屋の説明を受けた後、正面玄関から入り食堂を見せていただいた。6畳程のフローリングにテーブルが一つあり、8人分ほどのオムライスが蚊帳の中に並べてあった。職員の方の説明で、まずは食事を大切にすることであることを聞いた。「こういった福祉施設の中でも自分たちでちゃんと作っているところは滅多にない。そしてそれが決定的に大事だ。」という趣旨の話に多くの学生が頷いていた。そろそろと人一人分の廊下を進み、オフィスのソファに座ってからは実際上の運営の話などを話していただいた。主に次のような内容であったと記憶している。

- ・基本は3ヶ月以内で、仕事が定着したら出て行ってもらう。
- ・一年で100人を超える人が出入りする。
- ・若い人が多く、必ずしも路上生活からここに来るばかりではない。最近は困窮すると同時に路上生活の前で来る人も多い。
- ・身の回りのことだったり、食事のマナーみたいなところの下地が出来ていないと何事もうまくいかない。そこに関しては厳しく鍛えなおしている。方針として、3ヶ月で鍛え上げて自立できるところまで行くのはベトサダのやり方である。
- ・施設長である山崎さん自身もここで真鍋さん（ベトサダ設立者）に救われた人であり、だからこそ彼等の気持ちがわかる。
- ・少し前までは毎週土曜日の夜といえば、ろうふく会から電話が来て1,2人急に入るのも珍しくなかったが、最近はめっきりない。路上をとりまく風向きも変わったのかもしれない。

以上のような話を1時間程していただいた後、学生が一人ずつ質問などをして終わった。労福会の学生にとっては実際に脱路上した後のことや、一度社会(*)から弾かれてしまった人がどう社会に適應していくのか、思いを巡らせる機会になったように思われた。あるいは「どういった人がベトサダに向いているのか」「どういう人には難しいか」など“福祉団体”に癖や長所や柄といったものがあることを肌で感じ取ることが出来た。もしかしたらそういった知見は今後の脱路上を考える上で、もっと言えばそれぞれの生活困窮者の社会との接点を考える上で必要不可欠なものだったのかもしれないとすら思われた。そして北星学園大学の学生が最後にこぼした「（これは）福祉ではない。」という言葉には個人的にひどく感じ入った。政府と制度を本流とした大きな流れの中で、福祉の“運用”による「齟齬」「誤訳」「誤解」「変質」そういったものについてのフィードバックや自己浄化能力、内省的な機構を持ち得なかったのではないだろうかと考えさせられたからだ。

なにせよ、これまでの僕自身ひいては多くのろうふく会員が共有していた、ベトサダやシェルターにつなぐことで、“脱路上出来た”という感覚について反省しなければいけないと切に思われた。それは路上生活者本人にとってもベトサダの人にとっても、最善の選択肢ではない事例がいくつもあったことから言える。そして、そういったことに気づくためにもやはり見学会や他団体との交流は決定的に大切であり、それは路上生活者を「労働」や「福祉」の観点から考える上でもいいきっかけになるに違いない。

最後に図らずも偉そうに批評しているような口ぶりなのは無意識の若気の至りなのであることをどうか許されたく思います。

*ここでは労働市場一般を指す。

2016年9月9日□学習会□山内

事例検討会（Tさん）

9月9日 事例検討会の報告を小山田くんがメーリングリストに投稿していたので転載します。
—————（転載はここから）

・ Tさんの事例検討

去る8月某日に相談と同伴を行ったTさんについて検討会を行いました。

Tさんの事例では生活保護の云々よりも内縁関係にある”女性（ろうふく会の夜回りでよく接触する）に配慮”した上でどのようにTさんにも接していくかというのを検討しました。

検討会にては「ろうふく会が情事にまで首をつっこむのは違う」という意見を皆が共有したように思えました。

一方で、”女性に配慮”するというのがすでにTさん側に立った視点であるというような指摘（奥さんからしたら配慮されるどころの話ではない）や、男性視点の支援のあり方について議論を深め、Tさんにもその奥さんにも付かず離れずの立ち位置から様子を伺うというスタンスにいったんの解決が見られたように思います。

また、Tさんと内縁関係にある女性のあいだにはお子さんがいてTさんがその親権を主張している問題に関しては、楠さんから法律的な親権はTさんには認められ難いだろうというところを説明していただき、今後Tさんと女性のあいだにろうふく会が立った時のアドバイスの仕方が提示されました。

・ Oさんの事例検討

25年度に小川さん楠さんで生活保護の申請を担当したOさんという女性からつい先日相談を受けたので、その報告も兼ねて検討会をしました。今回の問題はだまかに次の二つに絞られました。

1 女性の当事者に対して女性が話を聞くことの意味

2 女性の当事者が不快な思いを抱いている民生委員について

1：今回の相談には楠さんと酒井さんが対応したのですが、女性と女性がいたことで当事者が話やすい（ことに民生委員さんの行き過ぎた接触について）雰囲気になったことは特筆すべきだろうという話をしました。必然的に男性が担当せざるをえないことが多いにしても、同性同士が相談に適しているということを常に意識するのが寛容であるという結論に至っております。

2：今回の事例の当事者であるOさんをろうふく会に紹介したのはF氏という民生委員の人なのですが、どうも過去の別の事案や、今回の事案を検討するにこのF氏が女性の当事者に関係を迫るタイプの人間なのではないかというところで議論が活発化しました。当事者に異様に執着するというところで、当事者が助かる面もあれば行き過ぎている面があるというところでの問題点や、名誉職としての民生委員（個人情報管理責任等がない）がどれほどの介入を”民生委員”という肩書きでしていいのかなど、これまで表立って議論されなかった民生委員について話をした次第です。

一方で、F氏の諸問題を指摘する中であまりの事態に「クソ野郎だ」などと茶化してしまったことが、我々としては取るべき態度ではなかったという内省的反省や、こう言った時にどう対応すべきなのかといったことも話し合い、少なくとも我々が出すぎているとしてもなにかしらのアクションはあっていいのではないかと結論に至りました。（ちなみに民生委員のF氏の知り合いである市議会議員に相談してはどうか？という結論に至った。

その際にも当事者がどこまで信用に足るかと言う根本的な問題に触れながら議論を行えたことはろうふく会の強みであるものと思います。

・検討会そのものの反省として、事例検討用のフォーマットがあってもいいのではないかと意見が複数人から指摘されたこと、検討会の価値が実際に支援活動をしている人間の情報共有（負担の軽減）にあるということの二点を付け加えておきます。

—————（転載ここまで）

なお、この後F氏への対応をめぐっては、市議会議員ではなく札幌市民生委員児童委員協議会に連絡し、懸念があることを伝えました。対応を協議しますと言ってくれましたが、その後どうなったかまでは確認できていません。

2016年10月14日 □民生委員に関する学習会・事例検討会 □大野

はじめに

筆者に与えられた課題は、民生委員に関する学習会（ハラスメント事例を含める）について、その概要（目的・内容）を説明すること、考察（効果・課題）を行うことである。ただし、第1に、ハラスメント事例に関する検討会（9月9日開催）について記憶が曖昧であること、第2に、その学習会資料の作成に際しては筆者自身も関わっていたのであるが、学習会当日は諸事情のため欠席したことから、当日交わされた意見・議論の詳細について把握しきれていないこと、以上を断っておきたい。

I. ハラスメント事例に関する検討会

検討事例について簡単に説明すれば、平成25年度に生活保護申請のため相談に訪れたOさん（女性）から、F民生委員から執拗に関係を迫られているという件で再度相談を受けたという事例である。本事例を検討するにあたって、以下2点に焦点が当てられた。

(1) 女性当事者に対して女性が話を聞くことの意味

実際に本事例を担当したのは男性2人だったのだが、女性が対応することでOさんはより話しやすかったのではないかと、ということが指摘された。したがって、本事例のようなハラスメント事例をはじめとする事例については、原則、同性者が相談に応じることが望ましいのではないかと、という結論に至った。

(2) Oさんが不快な思いを抱いている民生委員について

過去の事例や本事例をふまえたところ、F民生委員はOさんのような相談者に対して関係を迫るタイプの人間なのではないかという点で議論が活発になった。民生委員をはじめ「支援者対当事者」の適切な距離感とはなにか、また名誉職としての民生委員がどれほどまでの介入を民生委員という肩書で許容されるのかなど、これまで表立って議論されることがなかった民生委員について様々な意見が交わされた。

一方で、F民生委員の言動に対して「クソ野郎だ」などといった誹謗中傷めいたコメントも目立った。ある会員の指摘にもあるように、労福会としてはとるべき態度ではなかったのではないだろうか（しかしながら、一個人として上記のような感想を抱かれることについては当然のことのように思われる）。労福会としては、こうした事態にどのように対応すべきなのか、という点を意識しなければならないのではないかと。これは事例検討会を開催する意義のひとつとして共有されるべきである。

II. 民生委員に関する学習会

この目的は、民生委員（制度）の概要説明をとおしてその本来的・今日的業務を理解することである。当日配布された資料には、第1に、民生委員の法的根拠とその位置づけについて（I. 民生委員とは）、第2に、全国民生委員児童委員連合会が示している民生委員の役割について（II. 民生委員の役割・職務）、第3に、官公庁が公表する統計資料をもとに、分野別相談・支援割合、活動割合、連絡調整割合について（III. 民生委員活動の現状）、第4に、厚生労働省（2014）「民生委員・児童委員の活動環境の整備に関する検討会」報告書をもとに民生委員の活動の現状と課題について（IV.

「民生委員・児童委員の活動環境の整備に関する検討会」報告書からみえる現状と課題）記載されていた。北星学園大学（社会問題と福祉を考える会）学生によって、配布資料を参照しながら説明・解説がなされた。

説明・解説のあとには、質疑応答の時間が設けられたり、この学習会をふまえてハラスメント事例を振り返ることができた。大変有意義な学習会になったのではないだろうか。この点は、参加者の次のような感想からうかがえる。

私自身、未熟とはいえ少しは専門的というか、発達障害に絞った勉強をしているので、見方や視点が偏っているのがすごいわかったなあと思いました。もっともっと他の視点から見ると違う見方ができて、よかったです（Sさん）。

熱心に聞いてくださり、質問もしてくださり、事例の話が出たりして、よかったです。こちらも学びになりました（Mさん）。

おわりに

以上、事例検討会と学習会について要説してきた。しかし、先述の理由からとても薄い記述になってしまったので、以下でより効果的な学習会・事例検討会を行うにあたって確認しておきたいことをあげて、挽回したいと思う。

第1に、事例検討と事例研究の峻別とその実践について。事例検討（会）とは「解決すべき問題や事象を個別に検討することによって、その原因・状況を明らかにして対応策を考えること」であるといえる。上記のハラスメント事例に関する検討会はこれにあたるであろう。一方、事例研究は「少数の事例について詳しく調査・研究し、それによって問題の所在・原因等を究明し、一般的な法則や理論を発見しようとする事」である。昨年、労福会では「路上生活者の子ども期に関する調査」を行ったが、これは事例研究に相当すると思われる。またこのようなフィールドワークのみならず、過去の活動記録を分析対象として特定の課題について明らかにするようなことがあってもよいのではないか。この点はぜひ検討されたい。

第2に、事例検討会の目的について。昨年の事例検討会では、その開催目的があまり明確にされていないのではないだろうか。主催者（担当者）には、その事例検討会が（たとえば、専門性、資質向上を目指すことを目的にしているのか、実践の理論化や効果測定を検証を目的にしているのか、それとも個別事例から巨視的に社会構造について考えることを目的にしているのか）どのような目的を含んでいるのかを明確することが求められる。いずれにせよ、誰のために、何のために事例検討会を行うのかという点は確認しておくのが望ましいであろう。

第3に、事例の性質と事例検討会の進め方について。事例はその性質によって「支援・活動プロセスを追った事例」と「支援・活動場面による事例」に大別される。前者はそのまま支援・活動の展開過程を記した事例であり、後者は支援・活動の実際に生じた特定の出来事や対人関係のやりとりの場面を題材にした事例である。そして、前者のような事例を扱って進行していくのが「ハーバード方式」、後者のような事例を扱って進行していくのが「インシデント方式」という。今後は、事例検討会の目的に沿ったかたちで事例の性質をふまえた事例選択と、それに適した進め方について、会員のあいだで考えていきたい。

第4に、事例検討会用フォーマットを作成することである。事例検討会で扱う事例に登場する路上生活者の抱える問題や課題、ジェノグラムやエコマップ、身体的・心理的・社会的側面に関する情報など、事例を読みながらフォーマットにそれらを記載して可視化することで、より効果的な事例検討会になるのではないだろうか。

2016年11月19日□学習会□山内

ホームレス実態調査（聞き取り調査）の振り返り

聞き取り調査の結果を集計し、下記の内容が報告された。

I 路上での生活について

寝る場所が定まっていない移動型の人が多く（問1）定まっているとしてもそれは駅舎の決まった場所でありテントや小屋掛けで居を構えることなく（問1-1、問2）、それは気温の差が大きい北海道の気候が大きく影響している可能性がある（問1-2）。

野宿生活を始めて5年以上経っている人が多く（問3）、途中でネットカフェに数泊したことはあるものの、基本的に路上以外の場所に身を移したことがあるという人はいない（問4）。また、はじめて路上生活をしてからそのまま野宿に至っている人がほとんどである（問5）。

仕事をしている人はおらず（問6）、仕事以外の収入のある人もほとんどいない（問7）。つまり現金収入が全くない生活を送っていると思われる。そのため野宿生活で困っていることは「食べ物がないこと」が一番であり、移動型であるがゆえになのか「清潔に保つことができないこと」も上位に位置づく（問8）。

Ⅱ 路上（野宿）生活までのいきさつ

建設関係の仕事をしていた人の割合が一定数いるが、日雇いではなく常勤職員（正社員）が多いという特徴がある（問9、問12）。そのため住居も民間賃貸住宅がほとんどで比較的安定した居住形態（住み込みや飯場、ドヤなどに比較して）だったことがうかがわれる（問10、問13）。サウナやカプセルホテル、友人宅などを転々とした末に野宿、というパターンではなく、アパートの部屋を出ていきなり野宿になったということだろうか

また、野宿の直前は札幌市内で仕事をしていた場合が多く、そもそも道内で仕事をしているというケースがほとんどである（問11、問14）。野宿に至った主な理由は「病気やケガ、恒例によって仕事ができなくなった」という場合と、「（野宿が）好きだから、仕事に嫌気がさした」など一見すると主体的に野宿を選択したような答えも見られた（問15）。これは札幌で野宿をしている理由にも「放浪中にお金がなくなった、旅行してよい場所と思ったから、札幌で遊んでいたため」といった回答があり、いわゆる「好きでやってる」「自業自得」という印象を持たれやすいようにも思う。他方で「なじみがある」という回答をどのように解釈したらよいか（問17）。

Ⅲ 健康状態

自分の健康状態を客観的に把握することは難しく（誰だって難しい）、「良好」と感じる人と「普通」と感じる人の実際の違いはこの調査ではわからない。また、現状認識として「病気はない」という回答と「受診していないので病気かどうかわからない」の差も同様にわからない。実際に検診を受けたら病気が発見されたということは過去の労福会の健康相談会でもよくあった。

Ⅳ 福祉制度

福祉制度（生活保護や困窮支援制度など）については、存在は知ってはいるようだが利用しようとは思わないという人がほとんどである。なぜ利用しようと思わないのか、自分は利用できないと思っている人や正直よくわからないと答えている人もいる。また、「路上が楽になってしまった、気持ちの整理がつかない」といった意見も見られた。言葉どおりに受け取ってよいか判断しかねる微妙な気持ちが読み取れる。

Ⅴ 今後の生活について

「今のままでいい」と回答した人は「今の場所になじんでいる」からというのが理由であるという。路上生活が長くなった人にとって、生活環境が変化することのほうがストレスなのかもしれ

れない。また、仕事を上層層と思っている人は少ない。これがなぜなのかという理由も丁寧に見ていかないとバッシングの材料にされてしまう危険性がある。もう少し詳しく聞くべき内容だろう。

VI生活歴

道内出身者が多く、結婚経験のない人が多い。親や兄弟はいるがこの一年で連絡を取ったという人は一人しかいない。家族関係がどのようになっていたのか（いるのか）、このあたりは子ども時代調査でも意識して聞きたいところである。公的年金は払ったことがあるという人が多い。今回納付期間が10年からで支給対象になるので年金がもらえるようになる人が増える可能性が高い。根金制度の動向について我々も把握しておく必要がある（おじさんたちの方が詳しくなっている気はするが）。

VIIその他

炊き出しをもっと増やしてほしいという声が2件あったことが印象に残った。

2016年12月23日□学習会□山内

ホームレス自立支援法について

1. 学習会の背景（学習会の目的）

来年の8月で「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法（ホームレス自立支援法）」が期限を迎えるにあたって、その延長を求める動きが出ている（ホームレス支援全国ネットワークなど）。労福会では個別の支援ケースの対応についての学習会は実施してきたが、ホームレス支援の政策的動向について勉強したことはほとんどなかった。そこで今回の動きに対して労福会としてどのように考えるか、そのための基礎的な知識を得るのが目的。

2. 学習会の内容

まず報告者より、ホームレス自立支援法の成立・施行に至る経緯、法律の意義と問題点、その上で延長が必要であるとされる理由について報告があった。ホームレス自立支援法はホームレス対策の基本法としての性格を持つものであり、単なる事業法ではないことがポイントであるとのことであった。もし基本法であるホームレス自立支援法が廃止されたら、路上の概数や生活実態の調査、国の方針に基づいたホームレス対策が実施されなくなること、ホームレス巢の増減を把握できなくなり、政策効果を検証できないこと、対策のニーズも把握されなくなること、といった問題が出てくる。また、ホームレス者の人数は毎年減少しており、昨年度から施行されている生活困窮者自立支援法ができたということで、ホームレス自立支援法の内容はそちらに移行するということ言われているが、実際に移行するのはあくまで事業の部分のみであり、しかも各自自治体の任意事業である。また人数が減ったといってもこの1年は下げ止まりの傾向があり、ここで法律が廃止されるとまた人数が増えるかもしれないのだが、その調査そのものも廃止されると検証もできない。ホームレス問題について国がどのような方針を持つのかといったことは問われ

なくなるため問題であるといったことが報告された。

上記の報告を踏まえてディスカッションがなされたが、「自立」という言葉をどのように考えるかということを中心に進められた。経済的な観点からだけでなく、自己決定による自立という考え方が障害者運動の分野ではあることなども紹介され、ホームレス問題にもこの考え方を援用できるのではないかといったことが議論された。

9. 労福会がお世話になった方々

ホームレス支援というのは一筋縄でいくものではなく、様々な支援を組み合わせアプローチしていかなければうまくいかないものです。その数ある支援の中のほんのささやかな一つである労福会もまた、一筋縄ではいかない団体であるため、様々な方々による「支援の組み合わせ」によって運営が成り立っています。今年度も本当に様々な方々のお世話になりました。

(1) 労福会の活動を支えてくださった団体・機関の皆さん

フードバンクである札幌市福祉生活支援センターさんには多大なる支援をいただきました。年間で30回以上行っている「夜回り」は、労福会の活動の柱ともいえますが、2016年度はほぼ全ての夜回りで、札幌市福祉生活支援センターさんからいただいた調理・菓子パンを配布しました。毎回異なった種類のパンの配布は当事者の方からの評判も上々で、夜回りのコミュニケーションのツールとしても非常にありがたいものでした。これまで夜回りのたびに購入していたカップ麺等の費用もかからなくなりましたし、炊き出しのメインメニューの食材を提供してもらうこともあり、活動経費削減に与える影響も大きなものでした。来年度もどうぞよろしく願いいたします。

ジョイン（ベトサダ、れおん、みんなの広場、アジールおよび基幹センター）の皆さんには支援のつなぎ先としていつもお世話になりました。また、今年度は労福会の学習会の一環として支援の現場を見学させていただきました。見学を通して、これまで労福会で行っていた個別支援活動の多くはジョインの皆さんが行ってくれるようになったのだとあらためて確認できました。今年度の労福会が比較的自由に活動を展開できたのは、ジョインの皆さんがいてくれたからなのだと思います。人数調査の調査員としても協力していただくなど困ったときにすぐに手を差し伸べてくれるありがたい存在でした。

札幌司法書士会の皆さんとは共催で炊き出し相談会を始めて12年目になりました。会場設営から後片付けまで、互いの役割分担を細かく確認しなくても一連の流れをよどみなく行えるほど、札幌司法書士会さんと労福会のチームワークは「洗練」されてきたように思います。来年度はさらに交流を深めて、新しい炊き出し相談会のかたちを企画してみてもよいかもしれません。また、

労福会主催の炊き出し相談会の際にも有志の司法書士の方に参加いただき、当事者が困っている法律上の相談に乗っていただきました。これからも末永くお付き合いさせていただければと思います。

ビッグイシュー札幌さんには炊き出しの際に不足したタオルの寄付を呼び掛けていただきました。いつも協力ばかりしていただいてこちらから何も返せていないと感じております。今後何か協力できることはないか考えていきたいと思えます。

反貧困ネットワーク北海道さんとは直接的な交流というわけではないですが、反貧困全国集会の報告者として集会に参加したり、映画上映会のスタッフとして企画のお手伝いをしました。今後は例えば労福会の学習会の一環として反貧困ネットワークさんが企画した行事に参加するなど、労福会としてもっと関わりを広げていけないか検討したいと思えます。

今年度は例年行っている人数調査だけでなくホームレス実態調査（聞き取り調査）もあったので、札幌市の担当部署（保護自立支援課）とのやり取りが例年に比較して多かったと思えます。ただ、具体的な調査の手順について話すばかりで、札幌市におけるホームレス支援をどのように考えるかといった話まではできませんでした。札幌市からの委託調査は労福会にとって貴重な財源となっているのは事実ですが、せっかく窓口の担当者の方とは話ができる状況ができたのだから、今後はもう少し踏み込んだ話ができればと思います（会の力量を考えつつですが）。

（２）労福会の活動を支えてくださった個人の皆さん

言うまでもなく、労福会の活動にはそれなりの経費がかかり、会員はじめ活動に理解をいただいた一般の方からの寄付・寄贈は非常に大きな支えとなっています。2016年度も過分なるご寄付・ご寄贈をいただきました。記して感謝申し上げます。

2016年度 ご寄付、ご寄贈いただいた方々（順不同）

石橋孝彦さま（江別市）	嶋田佳広さま（札幌市）	柏谷美沙さま（稚内市）
西島知佐さま（島根県）	山内克弘さま（札幌市）	廣瀬知弘さま（札幌市）
城戸佳織さま（東京都）	兼丸章一さま（江別市）	前田明裕さま
細谷洋子さま（札幌市）	小林幸一さま	楠 高志さま（札幌市）
杉浦郁子さま（札幌市）	ジェラルド・ハルボーセンさま（札幌市）	

人数調査に参加した有志の皆さま

10. 会計報告

文責：波田地

□□ 会計基準の変更事項

今期は特に変更なし。

□□ 収入の状況

会費、寄付金が前年よりも減少している。また今年度は助成金を申し込んでいないため、収入

は全体的に縮小傾向にある。しかし、今年度は5年に一度の聞き取り調査を委託・実施した(10月22日～10月31日)ため、結果としては**大幅な収支プラス(+18万4208円)**となった。

	学生	社会人	合計
継続会員	6名	17名	23名
新規会員	4名	2名	6名
再入会会員	0名	2名	2名
合計(前年度比)	10名(-3名)	21名(+1名)	31名(0名)

- ・学生会員が減少し、社会人会員が増加。ここ数年、一貫して微減傾向。
- ・前年度まで学生だった会員が、社会人として継続している(4名)。

□□ 経費の状況

計画よりも、**4万8749円(6.5%)の経費削減**となった。

特筆すべき点として、**夜回り**における大幅な経費削減がある。フードバンク札幌とのつながりが生まれ、無償でパンを譲り受けられるようになったためであり、従来のカップラーメン代やコーヒー代がかからなくなったことで、当初の計画よりも**76%もの経費が削減**された。収入が減少傾向にある労福会において、「出費ゼロで夜回りができるようになった」ということは、大きな意味を持っている。一方、**炊き出し**は、出費が計画よりも4～5万円上回ったが、11月26日の「学生が握った寿司をふるまう」という新たな試みによるところが大きい。

また今年度は、**組織費(広報費・研修費など)**において、ほとんど出費がなかった。**運営管理費**についても、事務所は星園プラザで安定的に運用されており、前年度と比べて特記すべき変動はない。

□□ 今後について

□会の最たる収入源となっているホームレスの実態調査の委託費が、ホームレス自立支援法の消滅により、今後入ってこなくなる可能性が高い。

2016年度会計決算書 (2016.2.1～2017.1.31)						
				北海道の労働と福祉を考える会		
				会計担当： 波田地		
1. 収支計算書						
【収入】						
(単位：円)						
勘定科目	計画(A)	決算(B)	差引(B-A)	内訳	金額	計画
会費	131,000	130,500	500	個人会員(学生10名)	25500	36000
				個人会員(社会人22名)	110000	95000

事業収入	408,000	664,030	256,030	実態調査（聞き取り）	230170	393000
				実態調査（目視）	406720	-
				実習受託料 北星学園	30000	15000
助成金	100,000	-	-100,000			
寄付金	110,000	90,000	20,000			
雑収入	200	329	129			
収入計	749,200	884,859	135,659			
【支出】						
勘定科目	計画(C)	決算(D)	差引(D-C)	内訳	金額	計画
活動費	463,000	488,216	25,216	夜回り	21,469	90,000
				炊き出し	195,671	150,000
				同伴・フォロー	10,627	33,000
				実態調査	254,979	190,000
				学習会	5,470	-
組織費	50,000	11,312	-38,688	意見交換会	0	0
				組織対策費	0	0
				広報費	1,312	15,000
				研修費	0	30,000
				連携費	10,000	5,000
運営管理費	236,400	201,123	-35,277	事務所費	90,660	90,900
				会議・通信・交通費	58,140	58,000
				事務消耗品費	5,363	21,000
				活動補助費	2,400	22,500
				雑費	44,560	44,000
支出計	749,400	700,651	-48,749			
当期収支	-	184,208				
	200		184,408			
前期繰越資金		1447950				
当期資金増減		184208				
次期繰越資金		1632158				

11. 2016 年度役員・会員名簿

1. 役員

- (1) 代表 山内太郎
- (2) 事務局次長 関本幸一
- (3) 監査役 安東朋美 石橋孝彦

2. 会員

学生会員（10名）

池百代 海老沢修一 小山田伸明 加藤智彦 上川拓哉 越橋宣之
酒井花笑 関本幸一 西山春菜 松原有吾

一般会員（22名）

安東朋美 石橋孝彦 小笠原淳 小川遼 小倉菜穂子 小澤司 柿崎さとみ 兼丸章一
柏谷美沙 楠高志 佐々木かおり 佐々木宏 嶋田佳広 須田伸 成田充子 波田地利子
平田なぎさ 水上砂恵子 山内太郎 山本朱莉 渡部友子

12. 審議事項

1. 来年度の活動方針（案）

2017年度に向けて下記の3つの活動方針を示したい。

①会員数を増やす

労福会の人手不足は以前から問題になっていたにもかかわらず、これまで具体的な対応をとっていなかった。そこで2017年度は具体的な手立てを考えて会員の確保をめざしたい。

②会員の学習の機会を増やす

会員不足の要因の一つに、会費を払って会員になるメリットがわかりにくいということがあげられる。そこで会員になるメリットとして今年度実施してきた学習会をより充実させると同時に、外部の研修会等の参加に関する活動費を補助するようしていきたい。

③労福会の新たな活動の可能性を探る（労福会独自のシェルター事業）

労福会が定例で行っている夜回り、炊き出し、人数調査の他に柱となるような活動を展開できないか、人手と予算の問題があるため慎重な議論が必要だが、積極的に議論していきたい。

2. 会員および会費について（細則の変更）

会費の金額が割高ではないかという声は以前からあった。会設立当初の議論では、会費を一定の額にすることで、意識の高い会員を集めるという趣旨があったが、2017年度の活動方針を踏まえて、会員の獲得を目指すため会員の定義と会費を下記のように変更したい。

現行	改正案
----	-----

<p>第 2 条</p> <p>①会の会員は、<u>一般会員、学生会員</u>および賛助会員とする。</p> <p>②会の会費は、以下の各号に定める次のとおりとする。</p> <p>一 一般会員 <u>5,000 円</u> (年額)</p> <p>二 <u>学生会員 3,000 円</u> (年額)</p> <p>③賛助会員は、個人賛助会員および団体賛助会員からなり、それぞれ以下の各号に定める 会費を年に一口以上納める者とする。</p> <p>一 個人賛助会員 10,000 円 (一口)</p> <p>二 団体賛助会員 20,000 円 (一口)</p>	<p>第 2 条</p> <p>①会の会員は、一般会員および賛助会員とする。</p> <p>②会の会費は、以下の各号に定める次のとおりとする。</p> <p>一 一般会員 2,000 円 (年額)</p> <p>③賛助会員は、個人賛助会員および団体賛助会員からなり、それぞれ以下の各号に定める 会費を年に一口以上納める者とする。</p> <p>一 個人賛助会員 5,000 円 (一口)</p> <p>二 団体賛助会員 10,000 円 (一口)</p>
---	---

3. 予算案

労福会は繰越金が一年分の予算を上回っており、活動費用のあり方については議論が必要な状態であった。今回の活動方針では、会員を増やすこと、会員の学習の機会をもっと増やすこととしていたため、組織費に計上した。ただし、会費の引き下げなどを考慮すれば持続可能な執行も求められる。そこで2017年度は2016年度に繰り越す額と同程度の金額(20万程度)を予算に上乘せして配分した。

2017年度予算案(2017. 2. 1~2018. 1. 31)

北海道の労働と福祉を考える会

(単位:円)

【収入】

勘定科目	16年度決算	17年度計画	差引	17年度計画内訳	金額
会費	130,500	80,000	50,500	一般会員 40 名	80,000
事業収入	664,030	400,000	264,030	実態調査	390,000
				実習受託料	10,000
助成金	0	0	0		
寄付金	90,000	90,000	0		
雑収入	329	300	29		
収入計	884,859	570,300	314,559		

【支出】

勘定科目	16年度決算	17年度計画	差引	17年度計画内訳	金額
活動費	夜回り	21,469	24,000	-2,531	
	炊き出し	195,671	200,000	-4,329	
	同伴・フォロー	10,627	10,000	627	

	実態調査	254,979	200,000	54,979		
	学習会	5,470	—		17年度は研修費に計上	
	計	488,216	434,000	54,216		
組織費	意見交換会	0	—	—		
	組織対策費	—	30,000	-30,000	新歓イベント	30,000
	広報費	1,312	10,000	-8,688	HP等更新アルバイト料	10,000
	研修費	0	110,000	-110,000	研修参加費補助	40,000
					研修旅費補助	60,000
					学習会	10,000
	連携費	10,000	10,000	0	反貧困ネットワーク	10,000
計	11,312	160,000	-148,688			
運営管理費	事務所費	90,660	91,000	-340	事務所家賃	83,000
					ロッカー賃借料	8,000
	会議・通信・交通費	58,140	60,000	-1,860	会議費	10,000
					通信費	35,000
					サーバ更新費	8,000
					交通費	7,000
	事務消耗品費	5,363	6,000	-637		
	活動費補助費	2,400	20,000	-17,600	活動費補助(5名)	15,000
					ボランティア保険	5,000
雑費	44,560	5,000	39,560			
計	201,123	182,000	19,123			
支出計		700,651	776,000	-75,349		
今期収支		184,208	-205,700	389,908		

4. 来年度の役員体制（案）

- (1) 代表 山内太郎
- (2) 副代表 小川 遼（新）
- (3) 事務局長 越橋宣之（新）
- (4) 事務局次長 加藤智彦（新）
- (5) 監査役 安東朋美 沼澤哲也（新）
- (6) 支援者相談員 平田なぎさ（新）

/森田靖

「わたしとろうふくかい」

私は昨年10月、北大のクラーク食堂で久しぶりに再会した小山田さんに誘われてろうふく会の活動に参加するようになった。もともと路上生活者支援そのものに興味関心があったわけではない。そういった活動は、他人事にすぎなかった。ただ、自分が何事に対しても好奇心が旺盛であること（正確には「旺盛でありたいと望んでいること」）、卒論に粛々と取り組んで大学生活を終えることに少し物足りなさを感じていたことから、この活動に参加するようになった。

私はあと少しで大学4年間を過ごした北海道を離れることになるが、ここ数日間ろうふく会に参加したこの数か月をさくっと振り返ってみた結果、大学生活の最後にろうふく会に参加してよかったと感じている。素直に。

それはただ単純に活動そのものが全て楽しかったということではなく、その時々ではマイナスの感情が自分のなかに芽生えることもあった。はじめて夜回りに参加したときは、路上生活者の方々と話すことそのものへの抵抗は思ったほど感じなかったが、路上生活者の方々と話す私たちをみる道行く人々の視線が気になった。また、路上生活者の方脈が絡のない話を延々としていたときは、虚しさも感じた。しかしながら、こうした自分のなかにある様々な感情に気づけたことも含めて、ろうふく会に参加してよかったと感じている。

唐突だが、私は大学生活後半から、日記をつけることを習慣としている。そのなかで、自分の心の動きについて、何か出来事があったときに自分の心がどのような反応をするかということを書き留めている。そのため、ある程度自分の心の動きについてはパターン化できていた。しかしながら、先ほど述べたような心の動きは日記をつけ始めてから感じたことのないものだった。ただ、よく考えてみると、日記をつけ始める前の自分の心のなかにはそのような動きが確かにあった。他人の視線が気になること、自分がしていることに虚しさを感じる。大学生活後半は、のほほんと平和に暮らしていたため、そして昔に比べてある意味器用になったため、忘れていた感情だ。社会人になる前にこうした心の動きを思い出せたことはとてもありがたかった。

このほかにもろうふく会で得られたものはたくさんあり、じっくり振り返ればいろいろと浮かんでくるだろう。だからこそ、参加してよかったと今素直に思うことができるのだろう。ただ、もう少しでフライトの時間なのでこの辺で。（すみません、こういう文章の締め方一度してみたかったのです。）

最後にろうふく会のみなさん、短い間でしたがお世話になりました！自分とは違う価値観を持った人たちと関わってみようと思って参加しましたが、参加した後はわりとみなさんのなかに自分と似たものを感じていました。またどこかでお会いできることを楽しみにしています。それまでお元気で！！

/ピム

In my opinion, this activity is useful because it helps me learn about Japanese homeless people, working process, and I get New friends.

At first, I had no idea about Japanese homeless people until I participated in this volunteer job. I found that Thai homeless people are totally different from Japanese homeless people. I have learned a lot about them. Also, I was impressed with working process of this organization. It is a good idea to give out bread for those who need.

Furthermore, I was so surprised that they even ask about the homeless information, such as medical condition and things they need. I hope I could do that in Thailand. Moreover, I got many new Japanese friends. I was so happy that

they accepted me as one of their group.

—
/引地諒

「活動参加を通して感じること」

もともと高校在学時にホームレス支援に携わるOBの方の講演を聞いたことがきっかけでホームレスという存在に興味を持っていました。大学に入学してすぐに労福会に連絡をして一度見学をしており、実を言うと私と労福会との初めての関わりは3年近く前のことです。当時見学したのは会議の日で、あまり楽観的でない内容に腰が引けてその後の参加を断念していました。昨年11月ごろに大学に掲示されていた労福会のビラを拝見し、再びホームレスの存在について興味を持つようになったこと、就職活動を前にボランティアのような活動しておくのも悪くないだろうという下心もあってもう一度参加する意思を持つに至りました。

活動に参加する中で、当たり前ではありますがホームレスの人たちの中には気さくに話してくれる人から寡黙な人まで様々な方がいることが分かりました。かなり詳しい知識を持っている人もいて、一体どこからその情報を得ているのだと驚きながら、自分自身と何ら変わらないと思うこともあります。一方で、驚くほど伸びきった足の爪や抜けてしまった歯、真冬の夜に地下道への階段にわずかな暖を求めて寝る姿を見ると、とりわけ生の問題に直面している存在であると感じます。加えて行政からはベンチに設置された横になることを阻むような手すりの設置や長時間の滞在を許さないとする張り紙がされるなど彼らを取り巻く社会環境も厳しさを増しています。私事ではありますが官職を目指す身に合って非常に複雑な思いです。

まだまだ活動の段取りも理解しきれておらず、自己の都合から活動の参加も限られる中でありますが、今後も労福会に関わりながらホームレスをはじめとする社会問題の知見を深めていきたいと考える次第です。

—
/柏谷 美沙

「目を逸らさないで欲しい」

ご無沙汰しております柏谷です。夜回りや炊き出しに参加されている方の中には、こんな人居たろうか？と思われる方もいると思います。私は、2年前まで労福会の活動に参加していました。現在は、札幌を出て地元で過ごしています。

地元は、北海道の北にあり、寒くて路上生活者が住める地域ではありません。そのためでしょうか、高校の修学旅行で、男子生徒が物珍しそうに東京の路上生活者を写真に撮って修学旅行の発表会に使う資料に載せていました。彼らの行為は、褒められたものではありませんがそれだけ私の住む町では、「路上生活者」という存在に馴染みがありません。

札幌に住む身内に労福会の活動を話した時に、「札幌にホームレスがいるのか」と言われたことがあります。札幌市に住む方すら「路上生活者」を身近に感じていません。

私は、路上生活者は存在しているのに、存在していないと覚えることがあります。寒い地域に住んでいれば、札幌に路上生活者がいるなんてわかりません。札幌に住んでいても意識しなければ身綺麗な彼らに気が付きません。存在に気が付いたとしても、目を合わせないようにして通り過ぎてしまえば彼らの存在を忘れてしまいます。労福会で彼らと接している方は、彼らは私たちと同じ人間だと知っていると思います。

労福会メンバーの中には、ほんの少しの食べ物と会話を提供して意味があるのかと悩む方もいると思います。ですが、私は、路上生活者1人1人を見ようとしている労福会の人たちは必要だと思います。

昨今、貧困の問題が大きくなってきました。貧困を身近なこととしてたくさんの人に、労福会の活動を知ってもらいたいと思います。

—
/大滝雅史

「応用問題としてのホームレス支援」

みなさん、こんにちは。2008年度に事務局長をしていたオオタキです。私と労福会に文章を載せるなんて何年ぶりだろうかと思いながら、キーボードを叩いている。

僕のことを知っている人は、「あれ、オオタキっていまなにしてるの」とか思うのかもしれない。だって、大学時代に「就活くたばれ！」とか言ってデモしたり、その後もニートしてたわけだから、そう思うのも当然である。いちおう説明すると、いまは紆余曲折あって精神保健福祉士という資格を取り、そして縁あって生活困窮者自立支援法という法律に基づく事業所で、働いている。人の相談を聞いて「あー」とか「うー」と言いながら、その人の生活がどうやったら上手くいくのか一緒に考えたり、手続きの手伝いをしたり、あっちに行ったりこっちに行ったり、役所や制度の悪口を言ったりして日々過ごしている。これを、カッコよくいえばソーシャルワーカー。ダサくいえば、相談支援員ということになる。

「大変なお仕事ですね」とか言われたりすることもあるのだけど、しかし僕自身はそんなに大変ではないというか、職場もゆるいし、労働環境もわりと良いので、少なくとも今のところ、そんなにイヤなことではない。むしろ労福会の時のほうが大変だったんじゃないのかな、と思うこともあるので、今日はそんなような話を書きたい。偉そうな書き方をするなら、普段、対人支援を仕事として行うようになった立場から、労福会での活動を振り返るとどうなるのか、ということになるだろうが、雑駁に思うことを書いてみたい。

1.

まず思うのは、「専門性がないことの大変さ」について。

労福会に関わる人は、多くの場合、福祉のことについて専門的な知識や技能を持っている専門家ではなく、ただの学生である。そうすると、当事者と関わる際に、基本的には「生身でぶつかる」ということしかできない。徒手空拳で現場に入り込むことになる。もちろん、なんらかの熱意だったり、知的好奇心だったりを元に現場で関わるのは決して悪いことではないが、それはある種の危険とも隣り合わせである。

なぜなら、目の前にある現象をどのように理解してよいのか、あるいはどのように解決すれば良いのか、手がかりが持てないからだ。当事者が利用できる制度のことも、あるいは対人支援において、どのように相手と関わり、相手のことを理解するのか、あるいは当事者と関わる際に自分の中に生まれる感情をどのように考えるべきかなどの手立てが（あまり）ないから。ほうっておくとバーンアウト（燃え尽き）などを起こしてしまう。一生懸命、活動に関わったり、当事者のために行動したけど、なんだか上手く行かなくて虚しくなってしまう、みたいなことはとてもよく起こる。

僕自身、事務局長として関わっていた頃はけっこう大変だった。毎週の夜回りや炊き出しでの当事者への関わり、電話対応、メンバー内での調整、メディア取材などなど、一生懸命やっていたが、だんだん疲れてきてうんざりするような、げんなりするような気持ちになっていった。「やってもやっても報われないのではないか」という徒労感に襲われたりもした。あるいは単純に忙しすぎたので、任期が終わった翌年度は休学することにした。まあ休学することそのものは別に悪いことではないのだけど、でも燃え尽きるほど打ち込んでガクツとなるのはあんまり好ましいことではない。ほどほどの負担で日々やっていくほう

が、継続的に関わられるし、自分にとっても当事者にとっても良いのではないかと思う。

今は、(山内) 太郎さんが現場で継続的に関わり、学生ともしょっちゅう飲みに行っているようなので、困ったことなどは抱え込まずに済むのかもしれないが、しかし当事者とどのように関わるのかについて、注意が必要なことなのは変わらない。

(ちなみに、ここでは詳しく書かないが、当事者との関わりということでは、「普通の学生」がゾロゾロ来てアレコレ聞いてくること自体、そもそも当事者にとって介入的で、暴力的な行為ともなりうる。それも、現場で当事者と関わる上で押さえておくべき事項の一つだが、とりあえずここでは取り上げない)

2.

さて、次に労福会について思うことは、「ホームレスに関する話は応用問題だ」ということ。基本的に福祉の仕事というのは、制度に基づいて何かを行うことが多い。障害に関する話であれば、障害者手帳などがあるかどうかとか、病院に通っているかどうかとか、そういうことが話題にのぼる。病院でしっかり診断されており、障害者手帳を持っており、そのことについて本人が抵抗を持っていなければ、対応は比較的簡単で、すでにある制度やサービスをパパッとハマていけば、それっぽい支援計画ができる、といった具合に（「それが本当に支援なのか」という批判は当然あるが、とりあえずの道筋は立ったりする）。

けれど、人は決して制度に合わせて生きているわけではない。法律の条文にどのような文言があるかなんかろうが、まず人間はそこに生活しているわけであるし、法律は常に人間の生活のすべてをカバーするというものではない（すべてカバーできれば、それが好ましいとも言いづらい）。だから、制度というのは、どうしてもそこに「ハマりやすい人」と「ハマりづらい人」を生む。ここで、メジャーな制度にハマりづらい人をマイノリティーと呼んでみる。さらに、そのマイノリティーであっても、制度にハマりやすい（制度で想定されている）マイノリティーと、制度にハマりづらい（想定されていない）マイノリティーの差が出てしまう。これは勿論、支援者や制度を運用する側の都合であり、「ハマれない人がわるい」というような話ではないのだけど、そういう事実はある。

その意味では、ホームレスの話はすごい。なぜならいきなり「住所がない」というところから始まるからだ。基本的に様々な行政サービスや制度は、ひとりの人間に住所や、それに基づく身分証などがあることを前提にしている。だから、住所がないという時点で、手続きの手間が一回りか二回り、膨らむ。時間も手間もかかる。

では、単にホームレスに住所を作れば解決するのかといえば、決してそんなことはない。なぜなら、「この社会においては誰しもホームレスになりうる」のが事実だとしても、「より制度にハマりづらい人ほどホームレスになる」からである。当事者は、様々な制度の網目に引っかからず、人間関係も切断されて路上まで来ている。いわば、様々なセーフティネットや制度という、スクリーニング（選抜試験！）をくぐり抜けた「選りすぐりの人々」が、路上には来るのである。であれば、単に生活保護を受けて部屋に移ったとしても、不安定な状態は変わらない。1人で手続きや仕事探しができることのほうが少ないのではないかと思う（これはホームレスに限らず、賃労働から遠ざかっていた期間が長かったりすれば、それだけそこに参入することが難しくなる、というごくありふれた話とも合流する）。部屋は安定した生活の必要条件ではあるかもしれないが、あくまでスタートラインにすぎない。

いま、労福会の人々が当事者の「脱路上」と関わる時、どこまで対応しているのか、実は僕はよく知らない（夜回りなどは参加していないので）。今は生活困窮者自立支援法における一時生活支援事業（要はJOIN）などがあるので、相談機関を紹介すれば良い、という話なのかもしれないが、ともかく道のりは長い。

3.

また、「路上まで来ている人ほどハードだ」という話をさらに掘り下げていくと、当事者をどのような視点で理解すれば良いのか、複雑な話に入り込んでいくことがわかる。これは1で触れたバーンアウトの話とも関係しつつ、表象の話とも言える。表象というのは、要はある出来事についての「描き方」といっても

良い。ホームレスや貧者をいかに捉え、語るができるのか。

一般的に言って、ホームレスというのは、貧困問題の当事者であり、社会的排除を受けている存在である。ある人々が、「ふつうの生活」から排除されている事実。社会問題の被害者として人権を剥奪されている。「これはなんとかしないとイケない」というのが総論。

しかし、ややこしいのは、そうした「社会の被害者」たる当事者が、往々にして「加害者」としての側面をも持ち合わせたりしていることである。たとえば、分かりやすいのは何かの犯罪に関与している（していた）とかいう場合である（刑務所から出て、行き場がなくて路上に来るパターンは実際に多い）。盗んだり、威圧的な態度を取ったり、暴力を振るったり。そこまでいかなくとも、人に対する態度が全然一定しなかったり、理不尽なことで怒ったり、約束を守らなかったり、嘘をついたり、急にどこかにいなくなったり。そういったこともある。普段は温厚で、こちらを信頼していたように話していた人が、いきなり態度を急変させたりするわけだから、こちらはビックリしてしまう。

しかし、当事者が持ちうるそうした「加害者的側面」というのは、実はあまり語られることがない。それは、ある意味で貧者に対する心無い偏見を助長するからだ。当事者がどのような態度を持ってしようと、貧困問題の残酷さは変わらないのだから、ことさら強調しても仕方ない、と。

『最貧困女子』がベストセラーとなった、ライター鈴木大介は、こうした現場の実態について、東洋経済オンライン上の連載で、葛藤する文章を書いている。そこで言及されている、貧困問題についての一つの（そしてよくある）語り方は、少なからぬ貧困当事者の持っている「面倒臭さ」をあえて描かない「バイアスマード」である。それによって、「貧困問題は誰も陥りうるような話なんです」という議論に持ち込み、そして貧困問題への理解を広げていくやり方だ。これには一定の（というかわかりやすい）効果がある。共感も得られやすい。

しかし、それは同時に当事者を美化した語りをすることにより、現場で出会い、聞き取った話を歪めることにもなる。そして、こうした書籍を読んだ人がボランティアなどで現場に行っても、「なんか読んだことと違う」というショックを受けたりする。ショックを受けるだけならいいけど、当事者からなんらかの被害（たとえばセクハラなど）を受けた際に、それを言葉にできずに抱え込んでしまうということもある（「社会の被害者」としてのホームレスを絶対化してしまうがゆえに、自分の受けた被害を表現する方法を持たない、といったように）。

では、そうした加害者としての像をも含めて「面倒くさいひと」としての当事者がいたとして、どのように考えるべきなのか。二つのことを挙げてみると、まず一つに、「どうしてそうなっているのか」という視点である。その当事者が一定の面倒臭さを持っているとしても、その背景に複雑な生育環境があったり、精神的な疾患や障害がある可能性もある。それを一歩引いた視点で考える必要がある。鈴木の言葉を引用してみると、こうだ。

服装がだらしなく、不潔で臭いがする。行動も粗暴。これも貧困当事者取材でのアルアルだが、これにしても彼ら彼女らがだらしないからでも、人格が破綻しているからでもない。生い立ちから貧困の中にあり、衛生観念や基本的な生活習慣を身に付ける教育すら、ネグレクトな環境の中で与えられてこなかった結果だとすれば、どうか。

ウソつきで荒っぽく不潔な貧困者の像は、長く社会から疎外されてきた被害者像にガラッと転じる。扱いづらい彼ら彼女らの背後に、誰からもケアされず腹を空かせ汚れて泣いている子供の姿が透けて見えてくるのではないか。（鈴木大介「貧困者を安易にコンテンツ化してはならない」）

表面的には「面倒くさい」「やばい」人だとしても、そこにはなんらかの背景があるかもしれない、と考えること。多様な視点でもって、分析すること。

もう一つの考えるべきことは、「そうした人にも、当然に生きる権利がある」ということである。正直、当事者の中には「これは関わりたくない」という人もいるのも事実であるが、それでもそうした人にも生きる権利というのはあり、路上や、社会の隅で死ななければいけない理由はないのだ、ということ。こうして視点がないと、結局は「こんな連中の世話しなくてもいいでしょ。自己責任だ」などと、「ヘイトスピー

チ・ケースワーカー」(そんな言葉はない) みたいになってしまうのである。権利の話は、生活保護がそうであるように、どこかドライで内面不干渉なスタンスに依るものなのかもしれない。当事者がどのような人間であっても、それと生存権の有無は関係ない、という原則に立ち返ること。

とは言いつつ……やはりそこまでのことを簡単にできる人というのは、そうそういないだろうなとも思うのである。こうした関わりづらさを抱えた人に対して、なんとか理解可能な枠組みを用意して分析し、支援を行うのが専門家の仕事だけど、そこまでのことを学生ボランティアにできるとは、なかなか思いつらい。もちろん、どうせボランティアなのだから、できるだけのことをやればいいわけだし、できないことまでやらなくてもいいのだけど、大体は「気づいたらできないところまで入り込んでいた」ということがあるので難しい、と思う。

ともかく、貧困問題のような福祉的な問題は、ボランティアなどで取り組むのには限界があるし(専門家がやったって限界はあるけど)、慎重にやらないと、想定していなかったような問題に巻き込まれて燃え尽きたり、傷ついたり(傷つけたり)するということが起こるもの、と思う。その意味でホームレス関連の話は複雑だし、難易度の高い応用問題である、というのが、今のところ僕の考えていること。僕のふだんの仕事のほうがよっぽどのんきだと思うんですよ。みなさん学生なのに、大変なことよくしてるなと思うんですよ。29歳のおじさんは。

(ここに書いた話は、貧困問題「初心者」向けの内容ではないです。初めての方はまず「バイアスモード」の入った文章を読んで理解を深めてください)

補足。

これで話を終わりにすると、「やるだけ大変だし、無理じゃね」ということになるので、すこしましな話をつけくわえてみると、労福会はまずもって「考える会」であるということ。つまり、様々な情報や体験をもとに、様々な議論を交わし、思考を巡らせることこそが、労福会の活動の根底にあるものであって、何よりの価値だということ。頭かたい「支援のプロ」になんかならなくてもいいから、粘りっこい思索と言葉を練りながら、社会を別様のものとして見違えてください参照文献：

鈴木大介「貧困者を安易にコンテンツ化してはならない」東洋経済オンライン

—

/内山 明

「オーバーフロー」

こんなにも面倒な組織はめずらしいだろう。何もかもがあいまいで混沌としているのだ。

ある会員は

「労福会は目的が確立されていないから議論の余地があるし、そのほうが試行錯誤できるからおもしろい」と言い、肯定的に捉えていた。

別の会員は

「労福会は毎年同じ議論を繰り返している」

と言い、不満を感じながら退会していった。

さらに別の会員は

「労福会には興味がないけど、労福会に興味がある人に興味があります」

と言いながらニヤニヤしていた。

人によって言っていることが全然違うじゃないか。

私には労福会の目的が分からないし、目的の決め方も分からない。決め方の決め方も分からない。成功と

失敗の判断基準も分からない。

労福会で初めてボランティアをした人たちに私が

「あなたが目的を決めてください」

と言ったことだってあった。

私が考えるようなことは、たいていは過去に誰かが考えている。だから私はヒントが欲しくて労福会の過去の資料を読んだし、ホームレスとはほとんど関係がないような本も読んだし、大学の講義に出席した。

他の組織の人たちに会いに行き、助言を求めた。

こうして私は「概念」を手に入れていった。「概念」の代わりに「理論」と言ってもいいし、「アプローチ」や「先行研究」、「検索ワード」、「着眼点」と言ってもいい。たとえば・・・「動機の純粹性」、「マイノリティ憑依」、「社会モデル」、「定型発達症候群」、「欠如モデル」、「意識高い系」、・・・いや、「意識高い系」をここに含めるのは無理があるか。

私がこれらの「概念」を携えてホームレス状態（または元ホームレス状態）の人たちに会いに行ったり、労福会の人たちと議論したりすると、今まで言葉にできなかったことを言葉にできたし、バラバラに見えていた物事の間関係性が見えてきた。

しかし、「概念」を使って相手を知ろうとすることは正しいのだろうか？相手へのラベリングになるのではないか？私の先入観を強める方向に機能するのではないか？

プライバシーの問題があるため、私が出会った人たちの事情をここに書くことはできない（この「出会った人たち」とは、労福会の会員やホームレス状態の人のことでもあるし、ありとあらゆる関係者のことである）。しかし、私がある人たちに会い行き対話を重ねると、そこに「リアル」がある、ということは書いておきたい。

「私が持っていた常識」が通じない人たちが生きていて、
その人たちは、
生まれたときは赤ちゃんで、
分かれ道もたくさんあって、
喜怒哀楽があって、
ホームレス状態になったり労福会の会員になったりして、
私のこの文章に影響を与えている。

私が現場に行ってその人たちの「リアル」を感じ、もう一度「概念」に戻ると、あのとき手に入れた「概念」が厚みを増していくし、また別の「概念」が欲しくなる。そしてまた現場に行き、その人たちと対話を重ねるのだった。

私が「その人たち」と「概念」の間を相互に行き来することで、私の中にあった無意識の「ものの捉え方」を知ることができたとし、同時にどんどん分からないことが増えていった。

人は誰でも、自分の考えの過程や行動の理由を、本人でさえも把握できていない。私だってそうだ。

その人はその行動を起こすまでに誰と出会い、何を想ったのだろうか。

その人は今どんな世界と対峙しているのだろうか。

その人は、その人が持っていた「ものの捉え方」を、どのように更新してゆくのだろうか。

そしてなぜ私はこの文章を書いているのだろうか。

そんなところに私は興味がある。

このことはもちろん労福会の時間に限ったことではない。日々の生活の中で

「あ！これ、労福会でやったところだ」

と再発見することは何度もある。発見ではなく、再発見である。

見えなかったものが見えるようになったし、聴こえなかった声が聴こえるようになった。むしろいくつもの光や音が次々に飛び込んできて処理しきれないときだってある。世界はこんなにも豊かな彩りに満ちあふれているんだ、と思った。

賛成できないことを理解したいし、共感できないことを理解したい。
理解を飛び超えて共感したときが、おもしろい。

—
海老澤 修一
「私と労福会」

私事を言い訳にして大した貢献もしていない手前、口だけならぬ筆だけの感が否めないが、紙面が頂けるということで日頃思うことを書かせていただく。

労働と福祉を考える会(労福会)に参加するに至った端緒は、労福会の活動に参加している友人の誘いだった。その友人に日頃世話になっていたこともあり、2回目か3回目かの誘いで参加してみようと思いついた。

路上生活者との接触への抵抗は、もともとそれほど大きくはなかった。地元の駅前にはよく路上生活者がたむろしていたし、話しかけられることもあった。道で話すくらい、大して構えるほどでもないと考えていた。しかし、活動への参加に対し躊躇が無いでもなかった。抵抗の対象は寧ろボランティア活動をしている人に対してであった。ボランティア団体にいる人は、なんというか鼻息の荒いイメージがあり、活動や話についていけないのではないかと思っていたのである。結局のところはそうした心配は杞憂であった。杞憂であったからこそ、今もお邪魔しているわけである。

参加の経緯は以上として、活動のモチベーションといえば、高校時代に遡る。高校への通学路に於いて、路上生活者を目にすることが少なからずあった。当人たちがどう捉えているかは置いておくとして、殊に冬の寒空の下、冷え切ったタイルの上で眠る姿は見るに堪えず、悲惨と言っても足りないような気さえした。それを見ながらも、或いは毛布1枚を買ってくるくらいの余裕を持ちながらも、何ひとつせせずに過ぎ去る自分や周囲に嫌悪を感じずにはいられなかった。嫌悪を感じることによって自分の中に折り合いを付けたかったのか、或いは単純に良心からそう感じたのか、そんなことはどうでもよく、ただ惨めな気になった。幸いにして現在は、労福会を通じ、そうした人達に向き合う機会を得ることは出来た。彼らも、高校時代に見た人々と同じかそれ以上に過酷な状況で生きている。今こそあの時出来なかったことをするのだと、そうした気持ちを持って活動に臨んでいる、と言えれば良かったのだが、生憎、虚飾が過ぎる。

もし、本当に路上生活者の事を考えるならば、もっと積極的に活動に従事して然るべきである。活動に参加したことによって知りもしなかった路上生活者の1人を〇〇さんとして認識するようにもなった。以前よりもっと深刻に彼らの幸福を考えるようになっているはずである。ところが実情として、どちらかと言えば彼らの幸福が分からなくなる一方で、何をしたらよいか分からなくなるばかりである。生活保護を受けようとするれば受けられるのに、受けない。それは生活保護者を取り巻く環境に原因があるのかもしれない。では、生活保護以外に、彼らが脱路上をして、まがりなりにも生活していく術はないのか。少なくとも、思いつきはしない。

現在活動を続けている本当の理由を言えば、第一には彼らの胃袋がこの活動によって、暫時は満たされているということに”暫時は”充足感を得るからである。少なくともパンを手渡し、彼らがパンを食べるところを見る間は、私は取敢えずの安堵に浸れる。第二には、彼らの行きつくべきはどこなのか、ということを知りたいというものである。もし本当に路上が行き着く果てならば、落胆するばかりである。私たちの活動が、彼らの一時の生活を繋ぐものであるだけのものであることを願わずにはいられない。第三に、何故労福会があるのか、納得いく理由が知りたい。或る友人が、「(路上生活者の問題は、)本当は行政が対応すべき件であ

って、本来僕らがやる必要はない。」というのを聞いて、ただ頷くしかなかったのを覚えている。行政が(部署にも依ろうが,)多忙なのは重々承知であるが、現状に問題があるのは明白である。給与を与えられた人たちが匙を投げたことを、無給でやる人が居る。自らを賛美するつもりはないが、この構図を見て、いい気はしない。

色々勝手なことを書いたが、所詮は一学生の戯言であって、知る人から見れば笑い種にもならないかもしれない。しかし、悔しいかなその通りであって、現状これが関の山である。労福会に於ける活動の中で、(私の在り方次第なのであるが,) より多くの事を知ることが出来れば、とぼんやり思うばかりである

—

/大野慶

昨年は、大野が代表を務める自主研究会（以下、本研究会）と労福会による合同学習会を開催することができた。具体的には、市内某所にあるシェルター見学会、生活保護ケースワーカーのはたらきに着目した事例検討会、民生委員の本来的・今日的役割について理解することを目的とした学習会などが行われた。自主研究会からコメントすれば、社会福祉・ソーシャルワークを専門的集中的に学習している学生にとって、そうではない社会人・学生との議論は新鮮さを感じたことだろうし、同時に難しさのようなものを感じたのではないだろうか。労福会はどのようにコメントするだろうか。気になるところである。それ次第ではあるが、今後も継続的に学習会を開催したいと思っている。

以上は自主研究会の大野という立場で述懐したものであるが、以下では労福会の大野という立場で述懐したいと思う。労福会の大野といえ、4、5回の夜回りと1回の炊き出しに参加したくらいであり、(こうした労福会としての活動以上にその後の)酒席を楽しみに参加していた。そこでは、学問的な議論もさることながら、参加者の日常生活に関する語りから生活歴、生活状況、生活戦略なるものが垣間見えるときがあつてとても面白い。当然、路上生活者の語りもそれらを含んでいるのだが、酒好きということも相まって、酒席を楽しみに参加していた。ただし、それは路上生活者に対する支援活動自体には無関心であるとか、そういうことではない。この点は注記しておきたい。

以上、2016年度の大野と労福会を簡単に振り返ってみた。

—

/関本幸一

夜回りで出会う人達は、私に考える機会をたくさん与えてくれます。

夜回りでよく話すおじさんは、頑固で文句ばかり言っています。労福会の活動もしばしば批判され、どうして文句や批判ばかりを口にするのだろう・・・とっていました。肯定的な話をしない理由は、色々考えられます。コミュニケーションが苦手なため普通の会話では話ができずに、文句や批判を口にする事で人との繋がりを作ろうとしているのかもしれませんが、コミュニケーション能力が不足しているため、生活を立て直すために他者の協力を得る、交渉をする等ができずに現在に至っているようにも思います。他者に共感する習慣が身に付いていないことも考えられます。私は、文句ばかりを聞くのはあまり気持ちよいことではない、と思います。自分達の活動に対する文句だったりすると何ともやるせない気持ちになります。しかし、このように私が考えてしまうこと自体が、私自身のおごりなのかも知れない、とふと思う時があります。

また、そのように考える中で、人は育った環境、今置かれている立場により価値観が全く異なるため、人に何かするという事は難しい、ということも思ったりもします。相手のことを考えずに、自分で考えたことを相手のためと思い、いくら頑張っても結果がでないのは仕方がないことかも知れません。それは押し付けにしかならないからです。

しかし、相手のことを考えて行動したつもりでいても、知らず知らずに自分の固定観念に囚われて事を運んでしまうことがあります。

人に何かしてもらえばなんとなく嫌でも、お礼を言うことが私の中の「常識」でした。今までこの「常識」を自分にも相手にも当然の事のように押しつけながら生きてきたように感じています。「常識」にばかり縛られていると自分も生きづらく、さらに、相手にも息苦しい感じを与えてしまうことが多々あります。この機会に反省して、自分の思っている「常識」の殻を破り、今までの「常識」を超えた見方、考え方で物事を捉えないといけないと活動を通して今感じています。

—

/星野愛花里

私は労福会の活動に一回しか出たことがない。しかし一回とはいえ今までの考えを覆すような経験であった。それゆえ自分がどう関わっているのかわからず、このようにとどまっているのかもしれない。

最初は「生活困窮者」と聞くと、帰る家もお金もないホームレスを一番に想像し、自分とかかわりのない、自分なりに存在だと思っていた。世の中には人手が足りない仕事がたくさんあるのになぜこの人たちは働かないのか、とまで思っていたほどだ。一方で自分は途上国の貧困の問題を解決していきたいという思いで大学に来ていた。今考えたら恥ずかしいことであるが、日本には途上国ほど困った人はいないと思いついていた。

縁あって友人から誘われ、労福会のホームレス見回り活動に出ることになった。ホームレスと話すとき、どう接しているのかわからずとりあえず付いていった。普段ショッピングをするときに歩くいつもの道、いつもの人混みの中にその人たちはいた。話しかけられるのに慣れている人もいればそうでない人もいる。労福会の人たちはさりげなく、ゆっくりと、緊張を解いて会話を重ね、各々の状況を把握していく。「何かあったら言ってね」という関係を築くことが大切だという。その場所だけ時間がゆっくり流れているようだった。

一通り回って、ホームレスの印象が大きく違っていったことに気が付いた。得意な絵を描いて見せてくれる、ラジオを気の向くままに聞いている、ありがとうってラーメンを受け取る、自分の周りにはいる人たちとなんら変わりはない。では、なぜ「ホームレス」という線引きがあるのか、「ホームレス」を負のイメージでとらえるのはなぜなのか。こんな疑問を、誘ってくれた友人に話してみたところその一言にはっとした。「どうしようもなくホームレスになった人もいるけど、自らなった人も多んだよ。」ピンと来た。自分にも思い当たる節があった。

私は運よく大学生となっているが、その過程で都合の悪いものには目を背け、ほしいものを完璧に成し遂げようとわがままをし、周りに支えられた結果でもある。ただその時の自分を保つために行っていた。

“良い”と思われるもの、世間それなりのものを自然と身に着けて、広い世界に出てきているつもりであったが、逆に見えなくなっているものも多くなっていた。今の自分がいる以上この過程を否定することはできないが、ホームレスも生活の仕方の一つで、そこに普通はないということを心の底から思った。

今後便利に快適に暮らせるようになっていくのは有り難い。しかし人はそこで生み出された時間の余剰をどのように使うのか、精神的・身体的な余裕をどこにそそぐのか。今より個人を強める方に走ったら、その境界線はより曖昧に、頻繁に変えられる不安定なものになって、生きづらさを多くの人を感じるようになるのかもしれないと思うと、今のまま社会が前に進むのがいいのかわからない。それは先進国・途上国、自分と関係ある・ないに分けた話ではなく、今実感として私にも起きているようにも感じている。それでも日々をうまく生きてしまう自分は矛盾している。

山内太郎

「地味だけどいいね！」（山内太郎の私と労福会）

先日つくづく思った。「夜回りって地味だよなあ」と。ここ数年の総会資料によれば、夜回りの目的は、①安否確認、②信頼関係の構築、③新たに野宿者になった人の発見、の三つであるとされている。この中で③は最も活動の意義を見出しやすい。

例えば夜回りで「3日前に家賃滞納で追い出されて困っている。昨日から何も食べてない」などという人に出会ったりしたら、それはもう何とかしなければと、こちらも半ば興奮気味である。また、その人をなんらかの支援につないで、今は落ち着いた生活をしていると伝え聞いたり、本人から直接お礼など言われたりしたら、「ああ、よかった。僕がこの人の人生にかかわったことで・・・」などと思ったりするわけだ。これは活動の意義を感じやすい。ただし、現在の札幌における夜回りでは、そういった人に遭遇する確率は高くない。初めて会う人がいたとしても、声をかけたら無視されるのが通常だ（そりゃそうだ、いきなり心開く人の方が珍しい）。そこで②の出番である。

野宿生活に至る背景は人それぞれだが、多くの人が、おそらく人に言えない過去を抱えている。「騙され続けて人が信頼できなくなった」「人に迷惑をかけまくってきたから今さら助けてなんておこがましくて言えない」、例えばこんな思いでいる人に対して、相談してくださいと言ってもまず反応してくれない。中には話しかけてくるなど怒鳴りつける人もいる。それでも夜回りでは会うたびに話しかける（人によってはしばらく時間を空けるという方法も取られるが、次の機会をうかがっているのだ）。すると、今まで全く無視していた人がちょっとだけうなずくようになる。次会ったときはパンとビラを受け取ってくれた。その次にはありがとう、と笑顔を見せてくれた。その人との関係が目に見えて変わっていくときに、夜回りを続けていく意味はあるのかなと思えたりする。ただし、初めて会う人の数自体が少ない中で、②的な経験をすることでもまたそう多くないし、関係が築かれたからといってすぐに脱路上という話になるわけではない。夜回りの「常連さん」になる場合が多い。そして①である。

安否確認は、もちろん何かあった場合には対応することになるのだが、基本的には「皆さん、お変わりありませんか？」を確認することになる。実際の夜回りは圧倒的に平和である（これ自体はとてもよいこと）。いつも会う人といつもと同じ会話をする。気温の話とか他の支援団体の炊き出しの話とか、札駅のバスターミナルの人が増えた減ったという話とか・・・。今週の夜回りで交わした会話の内容は、先週と一字一句も変わらないのではないかと感じてしまうくらい同じ話の繰り返しである。脱路上しませんかと声をかけても、いやあ・・・と濁される。現状の夜回りはこの①の状態が9割以上を占めていると思う。もちろん初めて夜回りに参加する人にとっては、当事者との会話そのものが新たな経験として意義を見いだせるものになるのかもしれない。しかし何年も同じことを週1ペースで繰り返すというのは結構な根気が必要だ。安否確認はそりゃ大事だと思うけど、毎回同じことの繰り返しだとモチベーション維持するのも大変である。①は活動の意義を見出しにくい本当に地味な活動の一つであると思う。でも地味だからこそ味わい深い。

臨時福祉給付金という制度がある。説明すると長くなるので省略するが、ホームレス状態の人でも住民票があればその自治体から給付金がもらえるもので、夜回りではこの制度の周知と利用したい人のお手伝いを呼びかけている。今回、10年以上路上生活を続けている、我々もよく知っている60代のAさんが、給付金をもらいたいと申し出てきた。12月のことである。脱路上は考えていないが、年越しもあるからとAさんは言ってきた。道東のある町で十数年前に二人暮らしだった父親と折り合いが悪くなり、飛び出してきたのだと、Aさんはポツリポツリと話し出した。住民票はそのまま放っていたが、父親が住んでいるからまだそこに置いたままの状態のはずだとのことだった。彼と一緒に住民票があると言っていた自治体

の役場に電話をかけた。役場の担当からの返事は「Aさんという方の住民票は確認できません」というものだった。おかしいなあ、そんなはずないんだけどなあ、と首をかしげるAさん。そこで僕は、実家に電話をかけてみませんかと提案した。折り合いが悪くなった父親は生きていれば90代である。一瞬彼の顔はこわばったが、結局電話してみることにした。果たしてその電話の結果は「おかけになった番号は現在使われておりません」であった。もう一度役場に電話して、父親の名前を伝えて所在を教えてもらおうとしたが、当然個人情報ということで教えてくれなかった。おそらくもう亡くなっているか、どこかの施設に入所しているのではないかと、まいったな、と思ってAさんの顔を見ると、今まで見たこともないくらい晴れやかな顔をしていたのである。「おやじ、死んだのかな・・・」とつぶやいていた。僕はこの時になぜAさんが夜回りで生活保護の利用を進めても拒んでいるのかを察知した。と同時にこの人は今回をきっかけに脱路上をすると確信した。

住民票がないから給付金を受けることができないのであれば、札幌に住民票をつくりましょう、労福会の事務所を住所にして登録してもらおう。運営会議で提案した。この提案には会議の場でも賛否があった。実態のない虚偽の申請をすることになってしまうのでためらいがなかったわけではない。ある会員からメーリスの報告を読んで「大丈夫なの？」と電話で問い合わせをもらったこともあった。しかし、今回はAさんの脱路上を果たすきっかけとして絶対に外せない僕は思っていた。電話をしてくれた会員にもそのように話して納得してもらった。そこからの手続きについては山内ではなく全部加藤さんと越橋くんがやってくれた。住民票の問題があったので臨時給付金がAさんの手元に渡ったのは2月を過ぎてからだった。そしてつい先週の運営会議のことである。Aさんが生活保護の申請を希望しているから夜回りで相談したいと言ってるらしいという話が話題になった。その後の対応も加藤さんと越橋くんがやってくれた。そしてこの文章を書いている今(3月10日午後1時過ぎ)、Aさんは越橋さんと新しい部屋を見に行っている。

Aさんが脱路上を果たすだろうという確信を、あの時の顔を見た瞬間に持てたのだが、その根拠は何だと問われれば、やはり夜回りで何度も顔を合わせていたからだと答えるだろう。毎回同じような会話をし、同じような表情をよく見ていたからこそ、あの時の顔がいつもと違うことにすぐに気が付けたのだ。夜回りは地味だけと味わい深い。

波田地 利子

ろうふくは

いつだって今が

黄金期

東みのり

「迷走中」

私が労福会に関わり始めて、早6年。この6年を振り返ると、短大を卒業して、就職。3年働いた後に転職し、今の職場では上司と呼ばれ、なんの自覚もなく、何を考える間もなく働いています。ただ、そんな中でも労福会のことはよく思い出し、あの時あそこで会ったおじさんは元気かなあ、と考えることもしばしばです。私には、何かあったら頼れる実家があり、姉もいます。そして祖父母も面倒は見ってくれるはず。

いずれ結婚もするかもしれません。自分が人生のどこかで躓いたとしても、どこかで誰かが助けてくれると思っています。だからこそ、路上で生活するに至った経緯の想像が、私にはつかないのです。どこかで誰かが、とってしまう。分からないことを知りたいと思う気持ちは、人にとって、当たり前な感情だと思います。ただ私は感が鈍いのか、半分以上は活動できていないにしても、6年間関わって、まだまだなにも分かりません。感じたことや聞いたことについての考えが、全くまとまらないのです。このボランティアは果たしてよい活動なのか、そうでないのか。誰にとって良くて、誰にとって良くないのか。さらには、どんな関わり、どんな働きかけ、どんな関係を築くとよいのかも全部まったく。そもそも、様々な経緯でホームレスとなった人が、なにを求めて、なにを感じて生きているのかも私には分かりません。普段私は、保育士として働いています。子どもの気持ちはわかるのに、大人になると急にハードルが高くて、..とりあえず私は、色んなことが知りたくて、先日『セックスボランティア』という本を買いました。そこには当事者への無意識な偏見、支援する側の葛藤が書かれていました。なんだかすごく共感させられましたが、やっぱり自分の考えがまとまりません。この答えが出るのは、いったい何年後なのでしょう。

—
小川遼

「ビール飲みたい」

壊疽した両足を投げ出すようにして、糞尿を垂れ流している老人。数ヶ月まえには元気だったあの人が、立ち上がることもできないでいる。大通駅の地下街に、酷い臭いが立ちこめていた。駅の職員たちは、優しい言葉をかけながら、自分たちが管轄する領域から追いやろうとする。病院に行ったほうがいい。風呂に入ってきたらどうだい。足は大丈夫かい。心配なんだよ。NPOの人もきてるから。僕も同じように声をかけた。弱った老人を慮るという道徳は彼を排除することと矛盾しない。それどころか、むしろ相乗的に機能していた。そのうちに警察がきた。地下街の飲食店から苦情が出ているということで、法的根拠も明白でないままに、脇を抱えられて彼は地上へ追い出された。駅の職員は帰ってしまい、僕らと警察と、市の職員が残された。

その後も説得は続いたが、彼は頑なだった。シェルターにも、病院にも、行くとは決して言わない。外は日も暮れて寒く、熟練のホームレスだとはいえ朝を無事に迎えられるのかどうか。そうした心配か、あるいは罪悪感のようなものが、立場も様々な人間をその場に何人も、何時間も留まらせていた。このまま死んでいいのだと彼は言う。死ねば地下街にも来ないのだから都合がいいだろうとも。寒さが、傍らの僕の身にも沁みはじめていた。

福祉に携わる人間はつついとおせっかいになりがちである。もちろん善意によるのだろうが、それはしばしば支援しているはずの相手を苦しめたり、保証されてしかるべき自由を侵す。またそうしたおせっかいは、社会の統制に活用されてしまう。今回の件では特に明白なように、彼の健康や幸福を慮る優しい言葉や福祉制度は、迷惑な彼を街から追い出すためによく機能しているのである。

僕はこれまで、逸脱した者を排除したり強制したりする、こうした権力のありようにいつも腹を立ててきたし、批判してもきた。だから彼へのこれ以上の説得は信義に反すると考えた。それに、警察も、後からきた救急隊員も、本人の同意なくして彼をどこにも動かさずにいた。それは法が僕の言うような価値観を尊重しているからだ。これ以上の干渉を肯定する材料は見当たらなかった。この時は。

そんなに死にたいのなら死なせてやろう。それも一つの選択だ。そんな気分になりつつあったとき、一緒にいた西山さんは、しかし違っていた。なんとか彼を死なせないように、まだ足掻きつづけていたのである。それを見ていると、徐々にばつの悪いような気分になった。彼女は素朴な意志に突き動かされて

いる。そう見える。疑念が確信に変わり、偽満が僕自身に露呈した。彼の決断にすべてを還元することで、ここから逃れようとしているのだ。それらしい理屈を並べてはいるが、それによって善意を偽装している。本当は早く切り上げて、ビールでも飲みたいと思っている。

彼女の行為が結果的に、この潔癖症気味な街の衛生管理に手を貸すことになるのだとして、あるいは静かに冷えて死んでゆくその自由を妨げたからといって、いったいどっちがましだろうか。少なくとも、動機においてより善良なのが彼女の方だということは僕自身にとってはあまりに明白だったのである。

さらに言えば、駅員と僕とは、一見して立場は逆のようでも、同じようなものなのではないか。そう思った。駅員の優しい言葉が前述のような積極的な干渉を招いて統治に貢献するように、僕は結局のところ自由主義的な統治に貢献している。自己決定の尊重というにしても、それは自己責任論とも地続きで、本人の選択の、自由主義経済やその他の社会的諸事情の帰結としての側面を隠蔽してしまう。そしてどちらも、自分が積極的に動かなければならない領域から、彼を排除しようとしているのである。自己決定を尊重する態度が、単純により倫理的であるとは言えそうもない。僕も駅員も同じように、自分の仕事を早々に終わらせようとしているのだった。

どんな言葉で、どんな正しさを訴えていけばいいのか。強制するのも、放置するのも、違う。動機が善ければ少しはましかもしれないが、それでもやはり違う。結果がましになるわけではない。それに、僕が西山さんの真似でもしようものなら、あつという間に精神が焦げついてしまうだろう。

答えの用意はない。ただ、今回の事例の結末は少し安心できるものだった。7時間超に及ぶ説得の末に、この説得自体がすでに拷問的なのだが、警察が措置入院の手続きをとった。精神錯乱による自殺企図というのが理由だ。見る人によっては、とんでもない人権侵害だろう。しかし、救急隊のストレッチャーがくると、どうしてか自らすすんで横になり、すすんで拘束されていた。相変わらずの減らず口で、病院なんか行かないと言いながらではあったのだが、ちっとも措置らしくない。

なんだ、本当は病院に行きたかったんじゃないか。そして、こんなバカみたいな時間に及んで彼を取り囲んでいた僕らも、実はどこかで、そんなことわかってたんじゃないのか。だからこそ、選択を尊重しようという考えが、単なる空疎ないいわけにしかならなかったんじゃないのか。言葉だけではこぼれ落ちてしまうものが、今回は拾いあげられたのかもしれない。

—

/西山春菜

私は皆さんのような頭の良さが無い。世間知らずだし、なんとか理論やなんとか主義なども学んでいない。だから現在の私の幼稚な考えは、これからも労福会にて様々な見聞をし感じていくことで、変化したり深まったりすることを願っている。今の幼い考えを人に伝えるのは恥ずかしいけれど、「私と労福会」を書くようにとのことで、稚拙ながら文章にしてみる。きっと、無知ゆえの楽観だ、きれいごとだ、と思われるでしょう。

-この世に生まれ、どうせ死を選ばず生きていくなれば、幸せを感じて生きたい。私の考えることの根本にはこの価値観がある。そして、文末を「一るべきだ。」に変えて、他人にも当てはめて考えている。この世に生まれたすべての人に幸せであってほしい。けれどそれはなぜか難しいことのように、世の中には幸せを感じずに生きる人がたくさんいる。世を何も知らない幼少期、自ら人生に不幸を望む子供はいない。それなのにいつからか暗い道を歩んでしまうのはおおかた（人との出会いを含め）環境のせいだ。その人自身のせいではない。だから、どんな人にも慈悲の心をもって接したい。光へ導けるなら、たとえひと時だけでも気持ちが明るくなるなら、手を差し伸べたい。

しかし問題は、幸せの価値観が多様であること。（私の価値観は他者に必ずしも当てはまらないこと、人と

関わる時はそれに注意深くなければならぬこと、それを私はこの団体から教わった。) 人の数だけ価値観がある中、どのような手を差し伸べるか。恐らくその模範解答は、相手の価値観を知り、決して否定せず、個別性ある支援をすることだ。けれど相手をまだ理解できていない時、基本的に「自分が相手の立場になった時にされて嬉しいことをする」思いやりが支援になると考える。つまりその場合、結局は自分の価値観が前提となる。(仕方あるまい?) 良いか否か自信ないがこの様な思考で、私は夜回りの活動をこう考える。「笑顔で会話しているだけだけど、それで路上の方々がその時だけでも明るい気持ちになっていればいいな。(人に笑いかけられると私は嬉しいもの!)」…なんともおめでたい考えだという自覚はある。しかし、それが私にとって毎週夜回りに参加する意義の一つだ。

労福会での出会いや経験のお陰様で、私は多くのことを考え学ばせていただいている。はじめは労働にも福祉にも関心を持たず何となく参加したのだが、今はこのご縁にとっても感謝している。今後は笑顔でいる他自分に何ができるのか模索していきたい。

何かと未熟な者ですが、これからもよろしく願いいたします。

—
/上川 拓哉

大学3年の9月。今思えば私にとってここが1つのターニングポイントだったのかもしれない。単位も取り終え、自分の大学へ行くのは週に2日。後することと言えば、就活の準備と私個人で取り組んでいるテーマ研究くらいであった。いずれも個人プレーの作業。兄弟がいない環境で育った私は、昔から個人プレーは得意であった。自分のやるべきこと、やりたいことについて「一緒にやる相手がない」という理由で諦める若者は多いように思うが、私はこの様なことは一度もなかった。1人なら1人なりに取り組んでみて決して妥協することはなかった。私はずっとこのように生きてきたわけであるが、社会人になる直前で、なにか足りないことに気づいた。社会に出る上で、1人なら1人なりに取り組めるというのも役立つとは思いますが、人と協力して取り組むという力も必ず必要になることに気づいた。そういった経験に乏しい私は、このままではまずいと思ったが、なにをすれば良いのかも分からなかった。そんな中、自分の大学ではなく北大をうろうろしていたら労福会を紹介された。「ホームレスの自立支援」私が今まで全く関わったことのない世界であったが、そこに惹かれ取り組んでみることにした。

労福会の活動を始めて見ると、ものすごく発見が多かった。普通に生活をしている中でホームレスの方と話す機会も関わる機会もまずない。実際、関わってみるといろいろな方がいるが、基本的には皆さん普通のおじさんである。1人1人事情も歩んできた人生も違うが、今この時を必死に生きているのである。その手助けをするのが労福会の役目であるが、これについても様々な意見があった。ただ単に生活保護をもらい路上から脱することが必ずしも良いというわけではないところが難しさである、そういったことなど、知らなかったことが沢山あった。初めて飛び込んだ世界であったが、一緒に活動していく仲間を支えられここまで取り組むことができた。これは、個人プレーでは絶対に得られないものであると言える。皆で集まり、チカラを合わせれば出来ることの幅が広がる。そんなことに気づかされた。そして、労福会のメンバーはとにかく優しい。私だけ他大生でアウェーなはずだが、皆のお陰で全然そんなことない。本当に感謝である。私にとって労福会は、自分の視野を広げてくれ私に足りない経験を補ってくれたものであった。ボランティアというと「人助け」というイメージがあるが私の場合、労福会のメンバーや路上生活者の方々に「助けられている」部分が非常に多い。こんなことになるとは入会する前は思ってもいなかったが、恩返しができるようこれから就職までの1年間精一杯活動していきたいと思う。

山口大輔（北海道大学大学院教育学研究院・研究生）

「ホームレスと“障害”について」

今年度は私的な事情により労福会の活動には、ほとんど参加出来なかった。しかしながら、私個人としては、この一年間は、大学院で研究する者として、ホームレス問題に関する研究を行ってきた。具体的にいうと、北海道内におけるホームレス支援施設利用者に関する調査研究である。昨年度、大学院修士課程の頃に行った研究の延長の仕事である。私の研究では、特に、ホームレス状態の人たちのもつ“障害”に着目している。

ホームレス状態の人たちの“障害”に関する問題は、労福会の主たる活動として行われている夜回りや炊き出しなどの場面で、ホームレスの人たちと寄り添い、関わっていると、日々、感じることである。ホームレスの人たちと関わっていると、本人たちのさまざまな困難さや大変さに直面することがある。例えば、生活保護制度につなげる同伴支援の約束をしても、ドタキャンされてしまったり、当事者が就労に就けたとしても、職務上のトラブルや人間関係のトラブルを引き起こしてしまう人もしばしばみられる。調査の結果を整理してみても、社会における適応性が欠如していることや、“普通”に出来ると思われる日常生活上のことが出来なかつたりする（洗濯ができなかつたり、お金の管理が出来ない等）。この背景には、知的障害や精神障害があるにも関わらず、適切な支援や医療に繋がってこなかったという事実が、本人に対して、不利な影響を及ぼしていると考えられる。さらには、ここでの“障害”とは、障害福祉制度に規定されている“障害”ではないが、社会生活を送っていく上での何らかの大変ともいえるのかもしれない。または、本人たちが長い人生を経ていくなかで、負の経験が蓄積されて、その結果として、いま現在において抱え持つ“生きにくさ”といえるものかもしれない。

そうした現状があるなかで、労福会の会員のメンバーもそうであるし、北海道内においてホームレス支援のプロとして従事している支援者の方々も支援することの難しさに直面していると考えられる。ホームレス支援に限った話ではないが、福祉に携わっているソーシャルワーカーなどの専門職としての難しさは、そのようなさまざまな困難や不利を抱える人たちとどう向き合っていくのか、どう付き合っていくのかということだろうと思う。とりわけ、ホームレスを経験していった人たちというのは、そうした不利や困難が単発なもの（一つの問題）ではなく、様々な問題が複合的に重なり合っているのである。そのため、支援者が伴走的に関わることが求められるし、支援者の力量も問われる。こうした意味で、ホームレスの人たちに対する支援というのは、一筋縄ではいかない。支援者側がホームレス経験者を支援していく上で、傷付くということもしばしばみられる。特に、労福会のような学生が主となるメンバーであれば、なおさらである。会の構成員として考えても素人の団体であり、言ってみれば、アマチュアの団体である。学生一人ひとりが主体であるので、支援者として完璧なことは出来ないが、時には、学生が受け持つ問題としては荷が重すぎると感じている人もいるかもしれない。しかし、そのなかでも、労福会だからこそ出来ることは確実にあるので、会として続いているし、これからも続いていく、それが大事なことではないかと思う。

北海道内におけるホームレス支援は未だ、発展途上の段階であるし、制度的にも生活困窮者自立支援法が施行されて間もない。実践的にも制度的にも、まだまだ試行錯誤の段階といえるのかもしれない。今後、この問題に対して、労福会としてどう関わっていくのか、会としてどこを目指すのか、どこまでやるべきなのか。労福会は慈善団体（ボランティア団体）であるが、もはや無償活動の域を超えているという声もありながら、年々、活動としての拡がりを見せている（会運営におけるさまざまな問題は否めないが）。私は、就職の関係で北海道を離れることになったが、ホームレス問題を研究する者として、私個人としても、北海道を拠点としてホームレス支援に関わる労福会の今後の動向に注目していきたい。

最後に、この一年を通じて、私が執筆した論文と調査報告書を紹介して、締めくくりたいと思う。北海道

内におけるホームレス支援施設利用者の現状（路上生活から施設入所した人だけではなく、いわゆる広い意味でホームレス状態の人の現状）に関する調査結果をまとめているので、労福会の今後の支援／活動に役立つことが出来れば、これ以上に喜ばしいことはない。労福会に関わるメンバーに、是非、一読頂ければ幸いである。北海道大学のホームページから、北海道大学学術成果コレクション「HUSCAP」から閲覧可能なので、参考にして頂きたい（Google からキーワード検索しても、閲覧可能）。

<平成 28 年度に執筆した論文等>

①山口大輔（2016）「北海道内におけるホームレス支援施設利用者の支援に関する研究―障害者手帳の取得状況と入所に結びつけた人・機関に着目して」『教育福祉研究』第 21 号。

②山口大輔（2017）「平成 27 年度北海道内ホームレス支援施設利用者調査報告書」『教育福祉研究』第 21 号別冊。

—

平田なぎさ

「ビッグイシューさっぽろ 10 周年と労福会」

今年 9 月に札幌でのビッグイシュー販売が 10 周年を迎えます。ときどきビッグイシュー関連で取材などを受けると「どうしてこの活動に関わるようになったのですか？」という質問を受けるのですが、それを話すときに必ず話す必要があるのが労福会のことなのです。なぜかという、そもそも私が初めに興味を持ったのはビッグイシューではなく労福会の活動だったからです。

2007 年、日本テレビの「ネットカフェ難民」という番組が話題になりましたが、私はそれを見ていました。そのときに思い出したのが、それよりさらに 1 年か 2 年前に東京の義父母宅に来ていたヘルパーさんが話していたことで、それは「うちの娘、埼玉に住んでるんだけど、そこの公園にいるホームレスが若い人ばかりなのよ」というものでした。私は「若いつて 20 代とか 30 代の人たちですか？」と聞き返し、ヘルパーさんが「そうなのよ」と答えて、当時はホームレス問題に関心があったわけではないので、私はそれがなぜなのかわからず、会話はそこで終わっていたのです。

そして、テレビの「ネットカフェ難民」を見た後、湯浅誠さんの著書『貧困襲来』を読んで初めて、「そういうことなのか」と気づいたわけです。

ちょうどその頃、私は苫小牧に住んでいたのですが、札幌に戻ってくることに決まったので、「札幌に何かホームレスに関わる活動をしている団体はあるのかな？」とネットで探したところ「北海道の労働と福祉を考える会」というのが見つかりました。

サイトを見たら、労福会のシンポジウムが開催されることになっていたので、「ちょっと行ってみよう」と苫小牧から札幌までやって来て参加したのが労福会の皆さんと始めて会ったとき、ということになります。当日はビッグイシュー日本代表の佐野章二さんがゲストで講演をしていて、そのときにビッグイシューというものを初めて知りました。

受付のところにいた学生さんとちょっと話をして正門のところにいた販売者さんからビッグイシューを買って、その日は帰りました。

その後、労福会の総会というのがあるということを知り、「見学させてもらおう」と、またまた札幌にやってきたところ、総会が行われた部屋で隣の席に座っていたのがシンポジウムのときに受付にいた鶴岡さんという学生さんでした。

「夜回りに行ってるんですか？」と尋ねたところ、「私は夜回りには行けないので、ビッグイシューの方を手伝っているんです」という話だったので、「じゃあ、私、もうすぐ札幌に引っ越してくる予定があるので、こちらに来たら手伝いますよ」と特に何の考えもなく気軽に言ったのがすべての始まり……。

結局、当時まだ小学生の子どもがいた私には夜遅い時間の夜回りよりも午前中に活動するビッグイシューさっぽろの活動の方が都合がよく、(それでも2, 3回は夜回りに行って、ああ、これは面白いな) と思ったのですが) そのまま今に至っています。

当時はビッグイシューさっぽろの代表は北大にいた中島岳志先生でしたが、その後私が事務局長ということで代表のような位置にはまり、抜け出せないでいます。

どうしたらいいでしょうか。(笑)

だんだん何を書こうとしているのか分からなくなってきましたが、とにかくどこの団体もおそらくそうだと思いますが、落ち着いたと思ったら何かが起こる、また落ち着いたと思ったらドタバタの事態になる、ということを繰り返してここまでやってきました。

先日、今、大阪で販売をしている元札幌の販売者で、労福会でも長年の付き合いがあった志村孝市さんが遊びに来ていました。(夜回りに参加したので会った方もいると思います) バスセンターに当時は20人くらい寝ていたのに3人しかいなかった、と驚いていました。10年経つというんな変化がありますね。

これから新たにビッグイシュー販売者になりたい、という人も現れないかもしれません。

ビッグイシューの販売者も多いときは5, 6人いたのですが、今は3人です。

みんなそれなりに年を取って、身体の状態もベストとは言えない中、それでも仕事を続けたい彼らがいる限りはビッグイシューさっぽろの活動も続いていくでしょう。

労福会のお手伝いは今はパン運びくらいしか出来ていないので、なんとも申し訳ないのですが、労福会ほど活動しているメンバーが若い団体というのは全国でも珍しいのではないかと思いますし、だからこそその苦労もあるでしょうが、ビッグイシューの方から何か手伝えることがあれば、できるだけ協力したいと思っています。

—
/柿崎さとみ

入会して数ヶ月が過ぎた。この会の存在は何年も前から知っていた。会の活動が気に入っていて、最近参加する事に決めました。

私はバックパッカーの旅人です。時折、自らの意思でホームレス、野宿者になる。同時に40年前から障害当事者なので福祉の恩恵を受ける立場でもある。世界約40カ国廻って、この国が弱者に対して非常に冷たい国ということを知っている。

明日は3月11日。東北の町が次々と壊滅し、福島原発たちは爆発しメルトダウンした。その様子を呆然とテレビで見続けた日から6年経った。未だに16万人が仮設住宅という名の収容施設に住み、メルトダウンした原発は放射能を吐き出し続けたまま、覆いも囲いもなく朽ち果て続けている。更に更にうんざりする事が雪崩れのように起きている。そんな国でホームレスのオジサンと弱者に優しい若者たちがいて、時折彼らと会話し行動を共にするのはとても気分がいい事なのです。

—
/山本朱莉

わたしは昨年5月、東京で安保法制廃止を求めるデモに参加した。平和を求めて歩いた。その道は自由だった。どこかの高架下か、うっすらとしか覚えていないが、とにかく暗い道に入ったときわたしは驚いた。目の前にはじめて見る光景が広がった。青い建築シートとダンボールでつくられた家の住宅街があった。そこの住人がわたしたちのデモを見ていた。わたしは目が離せなかった。「あれ、これ、見たことある。あ、映画だ。東京ゴッドファーザーズだ。」好きな映画を思い出した。誰も立ち止まらない。平和を求めてデモをしているから。ゴールまで止まらない。でもわたしは止まりたかった。驚いたのはわたしだけだろ

うか。今までわたしだけがこのひとたちの存在に気がつかなかったのか。わたしは見ないふりをしてきたのか。みんなは風景として見たのだろうか。わたしはなんでいまデモをしているんだろう。平和を求めて、選挙に行こうよと叫んで、わたしはいまあの住宅街をどう受け止めるんだろう。なんでデモをしているんだろう。わたしに何ができるんだろう。

札幌に帰り、ある2人に連絡した。「わたし、ホームレスの方の支援をしたいんですけど、札幌にそのような団体はありますか？」これが出会いだった。2人とも「労福会」と言った。今までいろいろな活動をしてきたけれど、自分で飛び込んだのはこれがはじめてだった。仕事でなかなか参加はできない。でも行けばいつも楽しい。仲間はずいつもいい人だ。夜回りも炊き出しも楽しい。打ち上げも楽しい。多くの同年代のひとと活動できることは当たり前のことではない。これだけの学生が主体的に関わる組織はなかなかないと思う。労福会に飛び込んだあの日から、わたしの見る世界は変わった。また視野は広がった。

—

加藤智彦

昨年の4月から会の活動に参加している。会の目的を考えると不謹慎かもしれないが、私はこの会での活動を楽しんでいると思う。来年は事務局次長を担当する予定である。はたして1年後にも同様に「楽しんでいる」と言えるかどうか、楽しみだ。

—

小山田伸明

「“俺はまだいいや。体が言う事効かなくなるまでは頑張ってみるよ。”」

早いもので小川さんに誘われてから3年が過ぎました。今やろうふく会の学生会員で一番古参であるようです。僕がこの会に入りたての頃には、下郷さんが事務局長をされており、上田くんが雑事をせっせとこなし、黒森さんがおり、大家さんがおり、柏谷さんがおり、そして時々高田さんがニタニタしながらちょっかいを出しに顔をだしていました。なによりエルプラザには足の踏み場もない雑然としたブースがありましたし、そこには毎月全国の支援団体や支援“個人”から詩や雄叫びにも似た報告書が送られてきていました。そのような次第で、あの時の僕の目に映るろうふく会の全てはあまりにうさんくさいものでした。そして今もなお僕には腑に落ちないことだらけです。

そもそも入会当初からして、僕自身の持ち前の傲慢さと路上生活者の意地っ張りな部分でもって、彼等に話すことが苦痛でした。そして今日に至っても生活困窮者のことを心から受容できないでいます。一体全体僕は何をしているのかわかりません。しかしそんな関係こそがある種、健全な人間関係なのかもしれないと思うこともあったのでした。気に入らない人を気に入らないなりに受け入れる仕方を学ぶことは、今日なによりもおざなりにしがちなことではないでしょうか。

もう一つ愚痴をいうならば、昨今の炊き出しに行く意義を全く見出せなくすらなっていることについてです。理由の1つはろうふく会に関わる路上生活者の減少によるものですが、とうとう1月に行われた炊き出しでは自分の概算で路上生活者が9名程になってしまいました。来場者数は約50人だというのに、です。もちろんその背景には多くの路上生活者が重い腰を上げて暖かい部屋に移ったことや、生活困窮者自立支援法のもと JOIN などの団体の功に寄るところが多いものと思われまます。しかしそういった変遷に無頓着なまま、路上生活者がむしろ片隅に追いやられている炊き出しについては、やはり懐疑的になってしまいます。といつついざ炊き出しで路上生活者でない方たちと話すと、思いの外楽しかったりもするのですが。(例えばいつもミンクの厚い毛皮をきてくるおばあちゃんや横柄な態度で段取りに文句をいうおじ

さんや、やたらと感謝を伝えてくるおじいさんのともかく雪まつりのついでに来た風なその表情に、僕は厚かましさよりも安堵をみたのでした。) そんなこんなでもはや「炊き出し」という仰々しさを取り払って、町内会の行事くらいノリでも却っていいのではないかと思ってしまう最近でした。これは積年の議題ですが、路上生活者のみを対象にするにせよしないにせよ『炊き出しの目的』は僕ら自身のために大切です。とかく路上生活者のことは一旦置いておいても、行う側にとって意味のある「ろうふく会」であることがむしろ当事者のためになることもあるのではないのでしょうか。

もちろんそうした閉塞感の一方で、ろうふく会にも新しい風が吹きました。初冬の炊き出しでの寿司、新しい学生の増加、タイからの留学生の参加、K さんの休学、臨時福祉給付金の一切、事務局長の不在(そして復活)、事例検討会の定期開催(復活?)、口風琴おじさんの入院、古参の路上生活者の脱路上などなどです。中でも致命的とも思われた事務局長の不在も、いないならいないでそれなりに役割分担がなされ、山内さんが陣頭指揮をとりと、ぎりぎりでも乗り切った一年でした。いうまでもなく山内さんには負担の大きい一年であったことと思います。(補足：以前よりこのような危機は多々あった模様ですが実際に不在の年はここ5年では初。)

そんな変わらないようで毎年違うろうふく会に色んな人が足を取られ、そして飽き飽きして行くのを何度か見送ったあとで、僕はろうふく会に何を期待しているのかわかりません。最近ではろうふく会はその支援団体としての名目から、むしろ当初のゼミに戻りつつあるようにすら錯覚します。誤解を恐れずに言えば、むしろゼミのままなのかもしれませんし、常々思うことですが会員のうち特に学生は自分探しのためにここに来ているような感があります。視点は路上生活者でなく、むしろ路上生活者をみる自分・我々というものに向かっているような、そんな推測をしてしまうのです。或いはそもそもろうふく会は支援団体ではなかったのかもしれませんが、当事者の外縁を広げる“機構”そのものだったのかもと思います。とかくそれでここまで来たのだとしたら、今だからこそ *avant-garde* です。(だからと言って能天気な褒められるものではないですが。)

こんな風にろうふく会について偉そうにわかったような口をきくと一年が終わったのを感じます。毎年それを繰り返しながら、何かできそうで何もできないままにろうふく会の季節を通り過ぎいくのでしょうか。いつか僕にもすっかり大人の匂いのする日がくるのだとしたら、せめて実った穂を垂れる稲でありたいと願います。

—
/なみすけ店主

「“何も咲かない冬の日、下へ下へと根を伸ばせ (作者不詳)”」

—
/楠高志

私と労福会 その2

毎年依頼を受けて書かなければならないと思いながら、忙しさを理由に書かずにいてそのままにしていたのですが、今年は小山田さんに2~3度メールを頂き、なぜか書き始めました。前回に私が、労福の総会資料に書いたのを調べたところ、何と!! 最初の代表の椎名先生が亡くなった年度、その年明けでした。それから10年以上の期間が経過し、札幌市の野宿者を取り巻く状況も全国のそれも変わりました。しかし野宿者問題の本質は、変わりません。でも、この文章の題は「私と労福会」なので、野宿問題につ

いては述べる場ではありません。

今年度のように、事務局長が存在しなかった時期が過去に1度ありました。とは言え、事実上事務局長の職務を、代表の山内先生が務めていたので、存在しなかったというのは正確ではないかもしれません。半年くらい続いたその時期を、リーダー不在のまま何とか乗り切りました。その中断時期以前と、現在と一つ違っているところは、以前は事務局長を、前任者が決めていたことでした。好んで立候補する人は大概無かったのですが、任期が終わる前に、無理に説得して（笑）後任者を決めていたという時代が創立以来続いていたのです。

そして話題が替わりますが、一時期（と言っても昨年一昨年あたりまで）なぜ労福会に社会人の会員が定着しないのか、という議論がありました。今その議論はなされませんし、なされないことを不自然と思っている人が果たして居るのでしょうか。そもそも「労福会」は学生を中心とした集まりであり、その中で一緒に活動している社会人が居ることが異常で、その理由を考えた方が答えが簡単に出ます（笑）。本人が答える、理由は単純です。夜廻りがしたいからです。習慣になっているので、特別な出来事が起こるか、札幌市に居ない時以外は参加しています。記録している人はいないですが、ほとんどの年度で、夜廻りに参加している回数が一番多いのは私でしょう。あり得ないことですが、労福会が無くなったとしたら、仲間を誘って夜廻りを続けるつもりです。今は、JOINの朝廻りに参加するという手もありますしね。

眞鍋千賀子さんの名前を聞いても、知らない人が居ます。私ももし夜廻りに参加しないで1年以上経過したとしたら、メンバーも替わり名前を知ってもらえない人の方が多くなるでしょう。一番影響力がある山内先生でも、程度の差はあっても同じです。みなさん、ちょっと想像してみてください。あなたが入社した会社が1年後に、社員メンバーの半数が入れ替わっているとしたら？ 別の魅力が無いと、そのまま居続けることが難しくなるのでは（例えば給料が高いとか。）？

今年一度も発行されなかった（笑）労福の広報誌の題名は、いままでの例によると『ともに生きる』でした。野宿をしている当事者と、短くはあるが一緒の時を過ごし、ともに考え悩むことがある限り、労福は野宿の人たちから支持されるでしょうし、その支持が続く間は労福は無くならずには続いていくのではと、私は予想しています

—

小笠原 淳
『至上命令』

喰うための仕事の締め切りと本稿の締め切りとがほとんど重なってしまい、小山田先生から催促のご連絡を受けて初めて、これにまったく手を着けていなかったことに思い到りました。そのようなわけで、とくに何も思いつかないのでごく普通の話綴ることに致します。こう見えて私は、そこそこ普通のことも言えるのです。

労福の皆さんにつきまとい始めてから17年が経ちました。当初30歳そこそこだった私は、来年には50の大台に乗ります。この間ずっと労福の活動が絶えなかったことはまことに喜ばしく、もちろん今後も絶えることなく続けられるよう切に願っております。少なくともあと20年ぐらいは続けていただきたいところです。昨年度はひととき不義理が続き、夜回りなどの活動にほとんど参加しない「名ばかり会員」に墮してしまいましたが、そのような立場で「活動だけは続ける」と虫のよいことを申す無礼を自覚しつつ、やはり20年ぐらいは頑張っていたらこうと言わざるを得ない。

というのも、20年ぐら経って私がまだ存命だったとしたら、相当の確率で労福のお世話になっている可能性があるからです。生まれてこのかた手取り年収200万円台の準貧困生活を脱することが叶わず、ほぼ間違いなく今後もそうだろうと予測できる上、年金受給は絶望的で、預貯金はゼロ、家は賃貸で財産といえる物は多量の本ばかり。その本も二束三文で処分できればまだよいほうで、古書業界の不況を思えば

むしろ廃棄費用が発生するおそれすらあり、家族は全員病没して子も孫も兄弟姉妹もなし、唯一の身内たるカミさんも終生連れ添うことになる保証はまったくなく、老後に頼れるものといえば労福ぐらいしか思いつかないのです。

もちろん、これまであれこれ見聞した成果で、野宿生活を送ったり微罪の累犯で受刑者となったり、という選択肢もあることは知っています。路上で生きていくノウハウはそこそこ心得ているつもりですし、刑務所のルールもそこそこ憶えました。しかしできれば、ある程度の自由を担保された状態ですこやかな老後を送りたい。週に2、3度ぐらいはエチルアルコールを摂取し、一日に5、6服ぐらいはニコチンタールを吸収したい。たまにはお肉を食べたい。自転車で銭湯に行きたい。ご婦人を口説いてフラれたりしてみたい。

私の老後がまずまず穏やかなものになるか、そうでなくなるか、すべては労福の存否に懸かっております。どうか、1人のオッサンの将来を背負っている責任をゆめ忘れることなく、怠らず精進なさっていただきたい。こんなことに精進したところで何の見返りも期待できませんが、世の中には往々にしてそういうこともあるのだと潔く諦め、1秒たりともこの私の老後問題を意識の外に迫いやらず、まさに労福の存在意義はほかでもなくそこにあるのだと信じて各自が強く内面化し、脇目も振らず邁進なさっていただきたい。

わかりましたね。

—
/平家勇大

労福会に参加したのはまだ三回目で、夜回りに関しては一度のみ。偉そうなことを書けるはずもないのだけれど、間抜けな顔をして、のこのこタイピングをする。

手前勝手だが、何故労福会の活動に参加したのかと言えば、社会正義などでなく、まず自分が知りたかったからとしか言えない。貧困、ホームレスと言う言葉で括られている人たちはどんな人なのか、どう生きてきたのか、どう生きていくのか。知って何ができるのかは分からないし、物見遊山と言われるのかもしれない。それでも、ホームレスという言葉でしか知らなかった人たちの名前を知ったことは自分にとって無意味ではなかったと思う。

人数調査では、寝ているホームレスの人をこっそり撮った。支援をするために、正確な現状把握は必要だと理屈で分かっているけど、この構図は落ち着かなかった。バッチリ防寒して、安全な場所から、カメラのレンズを通してホームレスの人を見る構図。深夜の札幌はすごく寒かった。

初めての夜回りで、チカホのベンチで座っているハーモニカおじさんと、警備員さんが口論をしている所を見た。警備員さんは、チカホの歩行者からハーモニカおじさんの苦情を受けて、自分のクビもかかっている、何とかしてほしいと言う。僕は、人に迷惑をかけてはならない世の中は嫌だと思ふ。でも警備員さんにそれを強要させることも出来ないし、自分だって同じ立場ならそうなりそう。綺麗な言葉ではどうしようもない現実の話だった。

他人事を自分事に近付けて考えるためにはきっと想像力が必要だ。想像力が乏しい僕には、「日本の貧困問題」を想像することは難しいけれど、ハーモニカおじさんの居場所問題に頭を悩ませることなら出来る。当たり前、同じように生きている人の問題だ。それを知って日本の貧困問題を語れるようになるとは言わないが、他の人のことを想像するうえで幾分マシにはなるんじゃないかな。

考えた、考えたとは言っても何もしていない。これから出来るかも分からない。けれど、もう少し関わっていきたくて思う。

—
越橋宣之

私が労福会に入ろうと思った理由、正直なところ核心に何があったのかわかりません。それは何だったのか今でも時々考えます。思うにバイト先の先輩がフードバンクで活動していたのを知り、大学生という人生の充実したひと時に愚直に活動に身を投じる姿に羨望のまなざしを向けていたのが遠因なような気がします。

かくして私はホームページで労福会の存在を知り、誰の紹介もないまま未知なる団体に足を踏み入れました。初めての夜回りは大学1年の3月でした。今でも初めての活動で印象的だったのは夜回り後の飲み会です。夜回り後に打ち上げがあると知らなかった私は、財布に数えられるほどの硬貨しか持ち合わせていませんでした。その時かけられた言葉が...

「なんとかなりますよ」

初めて来たのに銭もなく、周りには知り合いもおらず。こうして飲み会の席に座っている私は辛酸をなめるような気分でお酒に手を付けていました。今となっては「なんとかなりますよ」に恩を感じる人間となりましたが、当時は人に負い目を感じるのが嫌でした。こうして飲み会代を「次の時に支払いますから...」と残り終電へと急ぎました。この言葉が私にとって仇となります。いったい誰に飲み会代を支払えばいいのか...おそらく自分の分は折半されているだろうと決め込んだ私はこの問題に直面しました。そうして5か月間距離を置いてしまうことに。

もし、あの時財布に1000円札でも入っていれば...と今でも後悔しています。

そうして夏休みが訪れました。ふいに労福会を思い出した私は負い目を感じつつも再び夜回りに参加しました。そして今に至ります。まだあの時のお金は懐の中です...

私が労福会に入って変わったこと、それは目に映る視界です。今まで気にも留めず札幌の地下歩道を歩いていたのが一変しました。普段通り過ぎていく人たち...そんな中にも私が経験したことのないような生活を送っている人がいること。世界には戦争で傷を負った人、逃げ惑う人、スラム街で生きるか死ぬかという極限の生活を送っている人々がいる中で、こうやって毎日すれ違う人にも貧困を抱えている人がいるということ。私はこの現実、この現実を見過ごしてきた自分に愕然としました。

日本にも様々な貧困は存在しています。最近では貧困にある人を個人として映すメディアも多いですが、映される人を知らない以上、多くの方がそんなこと私に関係ないと思ってしまうのではないのでしょうか。憐憫の情を抱くことはあっても、心を揺さぶることはありません。

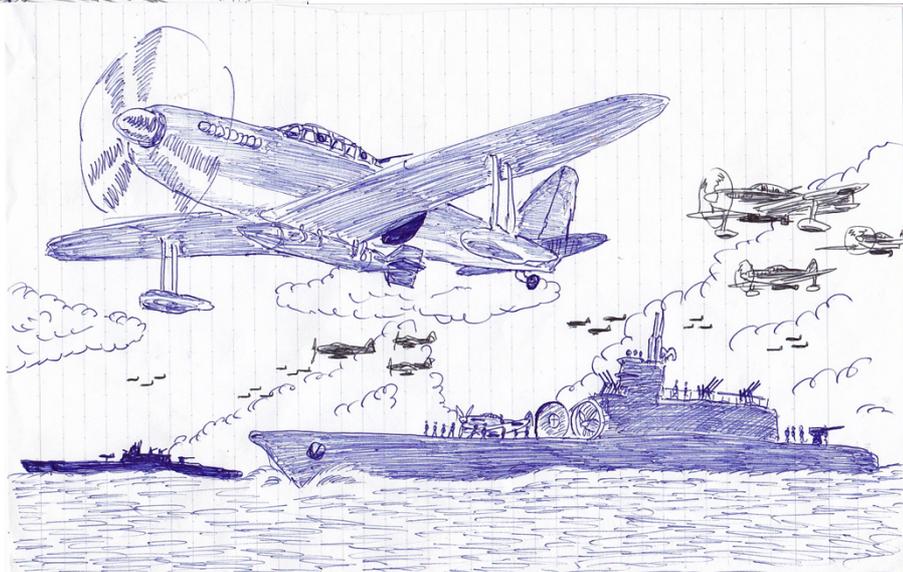
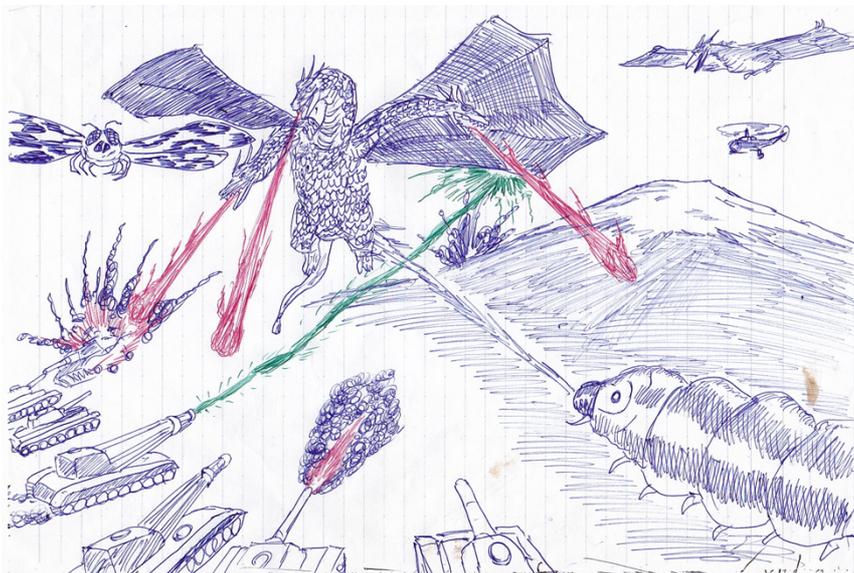
では人の心を揺さぶるのは何なのか、この活動をしてきて思うのは「知る」ことだと思います。労福会には多くの方が夜回りに参加します。でも大抵は一度きり。代表はボランティア活動としてみているからだといいます。ボランティア活動をして満足を感じるとそこで終わってしまう。確かにボランティアをすることは大事です。しかし、活動を続けていくには一人の人生に触れ、話を交わしそして、お互いを知り身近に感じる必要があるかと思っています。

時には夜回りで声をかけても叱責を受けたり、心無い言葉を浴びることもあります。でもこうして続けられる原動力は支援—被支援という関係の中にも情緒ある人間関係を築くことができるからだとは思いますが。

単に支援する、脱路上を目指していくのではなくて、そんな関係でありたいです。

<番外>

話は大きくそれるのですが、路上生活者のYさんがろうふく会員にチラシの裏などに描いた絵をくれることが多々ありました。最近はそのハイペースになってきているようにも思えます。しかもチラシの裏ではなく、レポート用紙に書かれているものもあります。脈絡がないのは重々承知ですが、個人的に嬉しかったのとYさんとろうふく会という意味合いもこめて以下に2枚を抜粋し掲載します。



///編集後記：3月10日午前0時33

家に着いたら送られてきた文章をまとめなければ、と思いながら帰路についた。夕飯の惣菜を買おうとセイコーマートに入ると、飲み会終わりと思われるスウェット姿の学生の一団が居た。男女それぞれ5人程が狭い通路にひしめいていて、僕は肩をすぼめて歩かざるを得なかった。背の小さい茶髪の女性がこちらをじろっとみた。整った顔をしていたと思う。僕は胃が痛くなった。

うつむきながらお惣菜コーナーに着くと、焼きさんまの切り身に手を伸ばした。件の一団のうち一人が何かを買った。入り口で談笑していた他の面々は、とうとう僕に一瞥をくれただけで外に出た。さんまの切り身を片手におそらく2分ほど時間が止まっていたことだろう。思い出したように顔を上げると、フードコートに福井（仮名）さんがいた。ここのセイコーマートは閉店前の2時間程の間、よく福井さんが居るのだった。福井さんがちょうど席を立てて店をでるところだったので僕はバツが悪い気がして、もう一度うつむきながらさんまを片手に2分ばかりじっとしていた。福井さんが去り、顔を上げると、店に入って初めて店員さんの姿が目に入った。僕より年下と思われる新人風の女性店員が商品棚を確認しているところだった。盛んな一団が去ったあとで、心なしか安堵の溜息をついたように見えた。そして僕もそれを

みて安堵した。胃が軽くなった心持ちだった。迷ったあげくに焼きさんまをもってレジに行くと、そのアルバイト店員が慌てたようにスキャナーを手に持った。悪いなどは思いつつタバコを頼むと、案の定オドオドとしながら棚を一巡して持ってきてくれた。それを見てやっぱり僕は安堵した。

僕は福井さんの顔を覚えていたし、あの店員さんの顔も忘れないだろう。更にいえば入り口で僕をギロツと見た茶髪的女子学生も覚えているし、通路を空けてくれなかった一際身長の高い男子学生もひとまず記憶している。方やあの女子学生や男子学生は、僕の顔を覚えてなどいないに違いない。そしてあの女性店員のことも、福井さんの読んでいた新聞の競馬欄のことも、見えてすらいなかったに違いない。もちろんだからといって何が起こるわけでもない。綺麗な人に自然と顔が向いたり、野暮ったい男には睨みをきかせたりという一般的な傾向に特別な意味があるわけじゃない。そもそも人は普通は、周りを見ないものなのかもしれない。しかしやはり僕には福井さんが見えたし、新しく入った女性店員の緊張も見えていた。

僕はそれだと思った。ろうふく会に来てから、色んなものが見えるようになった。色んな人が、色んな思惑が、色んな弱さが、色んな不条理が見えるようになった。気がするだけかもしれない。だけれども見えようが見えまいが、見え無かったものが見えたという感覚は、結局のところ嬉しいことだったりする。都会の明るすぎる街灯はみんなを盲目にしてやしないだろうか。何も見え無い暗闇でするようなと同じ様に、やたらめったら手を振り回し、探り探り歩いてやしないだろうか。“見えない”から、常に不安で、探りながら・疑いながら、構えて歩いているのではないか。少なからぬ人が主張するように（少なくとも「汝を愛すが如く他を愛せ」という言葉があるように）、他人が見えるためには、自分が見えていなければやはりできないことだと僕も思う。老いも若いも、人を愛せない不器用な人間たちが、こうして人を愛する仕様を知ることが出来たのなら、これはもう社会運動だ。

そんなことをつらつらとどっかに書き起こしたいと思い、勝手に編集後記なるものを付け足してしまった。しかしやっぱり皆の寄稿を読んでいると、見えないものが見えた瞬間を感じる。それぞれが見えたものが、生半可なドキュメンタリーが描くよりも正確に、質量のある実在を伴って書かれている。それに僕もまた心が震えた。・・・とか思いながら焼きさんまを一口食べて、本当は甘露煮が食べたかったのだと気付いた。

P.S.

せっかくの皆さんの文章を間伸びさせてしまった気がします。恐縮ですが、それだけ感動的だったということでどうかお許しいただけると幸いです。

小山田伸明

以上

